

---

# 猫さんといっしょ

田中 2 3 号

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

猫さんといっしょ

### 【ZPDF】

Z0861Z

### 【作者名】

田中23号

### 【あらすじ】

小さな村の青年が、ちょっと大きめの猫っぽいなにかを拾つたことからいろいろなことに巻き込まれつつ、マイペースに歩いていく物語。

## 第一話「猫さんを拾つた日」

突然ですが、大ピンチです。

なぜか目の前に見るからに肉食っぽい大きい猫がいます。

ちょつと森に入つて薬草を摘んでいただけなのに・・・

こんな森の入り口についていいレベルじゃないだろ!!

もつと森の奥に群れで棲んでるような感じでしょ君!!

・・・あ!

群れからはぐれたからこんなところに一匹でいるのか

なつとくなつとく・・・してる場合じゃないし!!

やばいやばい、まだ人生15年しか生きてないしまだ彼女もいた試しがないし最近やつと薬師の師匠で昔はお城勤めしていたすご腕薬師の婆様に「お前に教える事もなくなってきたねえ、うれしいけどちょっとさびしいねえ」とか言われてほろつときたり幼馴染のかわいいあいつが実は男だつたっていうショックから立ち直りきれてないし川遊びのときとかぜんぜん来ないで家でお勉強してるもんだから僕が1-2のころまで女だと思つてたんだよ小さいときにした結婚の約束とかどうするんだよちくしょおおおおおおお僕の純情をかえせええええ勝手に学術國家の魔法学院なんかに行きやがつて「僕のこと忘れないでね」とか涙目で上田遣いで手握られて舞い上が

つたちゅうと後に「コウリ君はす」とわねえ、学術國家の学校にいつらやうなんて。さすがクエスとサラの息子よねって村のおばちゃんに言われて「え？ 息子？」「そうよ？ サラに似て綺麗だけど。小さいころは一緒に川遊びしたことあるでしょ？」「え、あ、うん、え・・・? 本当に、息子？ ってか男？」「なーに。やだ、今まで女の子だと思つてたの？ 確かに綺麗だけど お・と・こ・の・子 よ」と笑いながら言われてハートブレイクしたあのときから3年も会つてないのになんかまだもやもやしてゐしあれけどそれつて俺もしかしてまだあいつのこと・・・うせつ・・・? あああああああああ違つ違つ違つ違つやつぱ今の無し俺は正常おれはせいじょ・・・ああけどあいつかわいいよな、なんんであれで男なんだ・・・あんなにかわいいに・・・あれなんでこんなことを考えて・・・

ハツ！ ! でか猫！ !

つて、あれ。

あの猫威嚇してるけど動いて無いし、弱つてる？

怖いけどなんかほつと子なこいし、少し近寄つてみると。

「怖くないよー、怖くないよー  
言つて思つけど犯罪チックな台詞だなこれ・・・

近寄つても飛び掛つてこないな。

つて、うわ、なんじゃこいつや、ほひびこ怪我だな。

うーん、手持りじゃまともな処置ができる。

応急手当だけして、村の婆様に見せるしかないな。ちなみに、婆様とは僕の師匠で、凄腕の薬師だ。

とつあえずひとさき摘んだ薬草と、布と水は確かバックにあったな。

「猫ちゃんや。応急手当だけしきゃうから、かゆつと染みるナビでされば食べないでほしいな、なんて」

「ぐぬぬぬ・・・」

お？ 猫が威嚇の体制を解いたな。

言葉通じるほど高位の魔物か」の猫さん。

とつあえず大丈夫そうだし傷口を水で洗つて薬草をちよつと揉んで布と一緒に巻きつけよう。

「れでよじつヒー

応急手当もしたし、あとお持ち帰つするだけか、このへりこのサイズなり向とか抱えれるはず。

「猫さん、猫さん。とりあえず応急手当したけど傷が深いのでできれば村に連れ帰つてちゃんとした処置をしたいんだけども。抱えてよろしいか？」

「ぐる」

つと、一鳴き。

おーけーつてことかな。

よし、おっもちつかえつりいい！

なんとか抱えれるな。

けど残りの薬草は放置だな」つや。

村まで急ぎますかつ！

## 第一話「天使様にお願いされた日」

でかい猫を抱えて、やつとの思いで村に戻る。

我が村、その名も「サイ村」。

でかい猫を抱えて猛ダッシュしてゐるのを見て。みんな声をかけてくるが返事をする暇はない。

急いで村の端にある我が家納屋に藁を敷き詰め、猫さんを横たえて婆様のいる母屋に駆け足する。

この時間なら部屋で薬草を煮てゐるかな、あたりをつけ母屋の婆様の部屋へ走る。

「婆様！でかい猫が森で怪我してゐたので連れ帰つてきました！傷が深いので急ぎで診てもらつていいですか！」

扉を開けると、またに薬草を煮てゐた婆様を見つけ早口で要件を伝える。

「分かったわ、納屋かしら？」

婆様は、書き混ぜていた鍋の火を消し、一いち方に向きなおる。

「はい、寝かせてあります！」

僕がそう言つと、婆様は手当箱を持つて早足で納屋に向かつ。

僕はそれに遅れ無いよひつこで行つた。

「応急手当がよかつたわね、新しい布と四番と十一番をお願い」

猫さんを一通り診た婆様が僕に告げる。

「わっかりました！ 布と四と四と十一ですねー。」

また母屋まで走つて診察室の棚から布と四と十一と書かれた引き出しの中の小瓶を持つて引き返す。

あとは婆様の独壇場である。

テキパキと治療するので、布を巻きなおすくらいしか仕事がなかつた。

「猫さんは何を食つかねえ？ 肉？ とりあえず果物をもつていいくか」

治療が終わり、猫さんが食べれそうなものを見繕つて納屋に戻るも、「猫さん！」就寝中だ。

猫さんは、婆様も見た事も聞いた事も無い種族だそうで。

どうしたものかと一人で考えるも、とうあえず元気になるまで面倒を見ようということになった。

「あとは僕が納屋に残つて猫さんを見とくので、婆様は母屋で寝てください」

いつの間にか夜も更けてきたので婆様を母屋に返し、僕は毛布に包まって猫さんの様子を観察する。

治療してから全然起きないので、起きたときに何か食べ物を与えないと困るので、僕は眠い目を擦つて何とか意識を保とうとする。

しかし、さすがに今日はいろいろあつたし、眠・・・い・・・。

「人の子よ。我が主の獣を助けてくれた」と、礼を言います

「のまえにしきなにかがあらわれた！」

夢か夢だよな。

なんか神々しいけど。さすが僕の夢だな。うん。

「夢ではないですよ」

「あ、はい」

えつと・・・どうひ様でしょつか・・・へと言へる霧因氣じやないな!

「人の子は私達のことを天使と言います」

ああ、心も読めるんですね・・・

「はい」

つて、天使様ですか、僕なんかしましたつけ、いや確かにあんまり信神深くないけども。

ちゃんとエッカ教の巡教シスターさんが来たとか広場でお説教聴いてお祈り奉げてますよ!

「先ほど言った通りです。我が主の獸を助けたでしょう。その礼を言いに来ました」

・・・あ!

もしかして猫さんのことですか！

「はい。あれは我が主が作りだした獣の末裔です」

へえ

つて天使様の主は神様の理論からいくと、猫さんってもしかして神獣・・・！？

「やうなります」

超V.I.Pじゃないですか猫さん・・・

そしてレアだ・・・

なんでそんなす』』『獣がこんな田舎の森にいるんだ！

しかも怪我してるし！

「元はアルバ大陸の靈峰サドンにいたのですが。生まれた直後に魔物が攫ったのです。怪我はそのときのものですね。すぐに親の神獣が追つたのですが、追い詰められた魔物が苦し紛れに転送魔法でとばしたのです。」

なるほど。しかし神様か天使様がぱぱっと助ければ良かつたんじや？

「天界に住まうものは、己の意思で世界に力を行使することは、ほぼできません。世界に請われた時のみ行使できます」

なるへそ。大変ですね。

「なので人の子よ。我が主の獸をサドンまで送り届けてはくれませんか。親の神獸も己の領域を長く空けることはできません」

アルバ大陸ですか。送つてあげたいのはやまやますが、ちょっと遠い上に僕は低位の魔物にもおくれをとりますよたぶん、そんなのが高位の魔物なんてとてもとても。

「もちろん、それなりのチカラを貸し『えます』

あれ、でも干渉はできないんじゃ？

「力の直接の行使はできませんが、我が主と私の祝福が『えられます』

神様と天使様の祝福・・・?ぐ、具体的にはどのようない？

「我が主は癒しを、私は守護を司っていますので、人の子が祝福を受ければそのチカラを得ることができます」

「おお、癒しに守護かー。それならなんとか・・・なるのか?」

「神獣はまだ幼いですが別の神の祝福を受けております。癒しと守護の祝福があれば魔物程度避けられるでしょう。送り届ける期限については、人の子、そなたが生きている間であればいいです」

「むむ、気の長い話ですね。分かりました。それではこの件お引き受けいたします。」

「おお、礼を言います、人の子よ。祝福はそなたが起きたときにはすでに成されているでしょう。それでは、頼みましたよ」

「あいせー、がんばりますよ!」

## 第三話「猫さんの傷と漆様の腰が治った日」

・・・

生暖かくざらざらして湿つたものが僕の顔に当たる。  
まだ眠いのに、なんだこれは。

「いやー？」

「いやー？」

寝ぼけ眼を開けると、猫さんが僕の顔を舐めていた。  
お腹でも空いてるのかな？

とつあえず押しのけて、僕は用意していた果物を猫さんに差し出す。

「はいはい、取つたりしないからゆっくり食べてね」

それにもしても、猫っぽいとは思つてたが、本当に「いやー」と鳴く  
とは思つていなかつた。

食べ物に夢中な猫さんを他所に、怪我の具合を観察する。

さすがに急に治るわけもなく、しつかり怪我は残つているのを確認  
する。

そこで、何故か内容をさつきり覚えていた夢のことを思いだす。

あの夢の癒しのチカラがあれば、猫さんもすぐ治療できやうだと

思つ。

しかしそんな夢が現実なわけがないとも思つ。

・・・

結局、何故かはつきり覚えてる夢の力を試してみることとした。  
なんて試してみようと思つたのか自分でも良く分からない、ただ妙  
なリアリティが夢にあつたからかもしれない。

しかし、祝福を『えたと言われたけど、どう使うのが分からない。

とつあえず、教会の人があつまつよつてついでに婆様の腰痛も治り  
(猫さんの怪我がなあつまよつてついでに婆様の腰痛も治りますよつて...)

これで治つたら僕は神様信じよつて思つ。

とつあえず一分ほど祈つて、猫さんの様子をみる。

「ちよつと包帯取りますよーっと」

なるべく刺激を『えなよつて』、猫さんの包帯をばがしてく。

「こやあ」

おとなしくられるがままの猫さんを撫でつつ包帯を剥がし終わるとそこには傷が塞がった猫さんの体があつた。

「ものすい」に驚いて、僕は猫さんの体を弄る。

しかし、確かめてみても猫さんの他のどこにも傷はなく、ただとても手触りのいい毛の感覚だけが手に残った。

「すい、神様すい！ 天使様もすい！ 夢だけど夢じゃなかつたのかあれ！」

僕は、神様の奇跡を田の辺たりにして興奮して叫んだ。

「あれ、といふことは、僕はお隣の大陸までお使いに行かないことがないつてことなのか・・・？」

そして、冷静になつて、昨日の夢が夢でなかつたのなら、僕がやらないことはいけないこと気に気がつく。

「こやあ～

「ああ、うん、猫さんもお家に帰りたいもんね。」

「こやん～」

おお、言つてることは完璧に理解してゐみたいだなあ、さすが神獣。

これは腹を決めて、行くしかないか。

「となれば、婆様に報告しないとか。あと腰痛治つたか聞かないと

「んーせんじ」

「いや、猫さん。わがこの田舎でのしかかられるとやばい」

「～あせた」

「甘えた声だしてもダメですー・とりあえず母屋に行つてくるから、おとなしくしてるんだよ！」

「ひせき」

と言つわけで母屋へ移動。

納屋に行こうとしてたら、婆様とちょうど廊下でかちあつたので話を  
があると呼び止めて一緒に居間に行く。

僕は、簡単に夢の天使様の話と実際猫さんの傷が治った話を婆様にする。

「ちよつと猫さんの様子、見てくるわ

僕の話を聞き終えた婆様は、信じられないといつ顔をして足早に納屋へ向かった。

ちよつと僕でも自分の田で見ないとこんなこと信じないだろ？と思つ。

とりあえず朝食の準備をしつつ待つていると、婆様はすぐに戻つてきた、

僕はパンとサラダを持って居間に戻る。

「本当に治つてたわ

「婆様に言われてやつと確信が持てた気がします

僕が寝ぼけていたわけではないことが証明され安心する。

安心すると途端にお腹もへつてきたので、とりあえず朝食を頂くことにする。

「ちよつと話も長くなじようでし、ご飯を先にこいたましましょう

そう婆様に言つと、さき火にかけた昨日の残りのスープを配膳する。

さすが婆様特製スープ、とてもいい匂いがする。

この味は、なかなか習得できないんだよなあ。

「日々の神の慈悲と恵みに感謝します」

「同じく、感謝します」

婆様の口上にすばやく賛同して、いただきます。

お腹がすいてたこともあり、すぐに田の前の食事が無くなつた。

しかし、神様からこの僕が祝福を受けるなんて思いもしなかつた。

これは、日々の感謝が欠かせないな。

あれけどお願い事されてるし、感謝されるのは僕なのか。

なんて熱心なエッカ教徒の前で言つたら「神が試練を与えてくださつたのです。感謝するのが当たり前でしょう」とて言われるな。

僕も婆様もあんまり熱心な教徒じゃないのでそこらへんの感覚がよく分からぬ。

けど、神様と天使様の祝福を頂いたわけだしな、信仰心は心の片隅にでも持つておこう。

祝福といえば、今朝の祈りを思いだして僕は婆様に質問する。

「婆様、腰の具合はいかでしようか」

「といえば、今日はすこぶる調子がいいわね、あなたが癒してくれたのかしら?」

「ええ、朝に猫さんの傷と一緒に治るように祈つてみたんですが。」

まさか本当に治るとは思わなかつた。

これは片隅じやダメかもなあ。

## 第四話「行つてきまよと言つた日」

さて、腹(はら)じらえと確認も終わったことだし婆様と大事な話をするか。

「婆様、僕はどちら本当にお隣の大陸までお使いに行く事になりましたようです」

「そのようねえ。薬師としては一人前と呼べる知識は持たせたわ。けど、長旅となると、また別にいろいろ必要な技術がいるものよ。なにより魔物に対処しないといけないし」

「魔物に関しては、猫さんが強いらしいので。後は僕も怪我はすぐ治せますし、守護の祝福というのも頂いてますので、そこまで心配いらないと思います」

「分かつたわ。あなたの事だから無茶なことはしないと思うし、古い先短い婆を悲しませるこもしないでしょ? 神様もついていることですしね」

「そうですね。古い先短いという部分以外は否定しません。神様もついていますし」

二人揃つて少し笑う。

「村のことも心配しなくていいわ。腰痛を治してもらいましたから、薬草取りもいけるわ。」

「けど無理はしないでくださいね。」

「まだまだ現役よ？」

「老い先短いつて言つてませんでしたっけ？」

「生涯現役ですから」

「かないませんね」

「うふふ」

本当に、この婆様に敵わないと思つ。

家のほうは頼もしい婆様がいるし大丈夫そだから、僕は長旅の準備をしようと思案を巡らせる。

「あ、うん、はい、分かりました」

「長旅の知識やらば、ユウリのお父さんのクロスに聞くといいわ。あの人は昔、冒険者として有名だつたから」

ユウリといつのは僕の幼馴染だ。

とてもかわいらしい外見の幼馴染だ！！

だが男だ！！

男なんだよおおおおおーーー

微妙な受け答えになつたのはそいらへんが起因してゐるんだ。

初恋は実らないものだ。

ちなみにコウリは今、学術国家の学校にいるため、3年ほど村を留守にしてゐる。

そのお父さんのクエスさんは、とても氣をくでいい人だ。

昔はふいぶいいわせていたらしいけど、奥さんのサラさんと駆け落ち同然でこの村に来てからは、剣を鍬に持ち替えて、頼れる人として村の相談役にもなつてゐる。

そして奥さんには尻に敷かれている。

奥さんのサラさんは、貴族のお嬢様だった、なんて話もあるくらい、上品で柔軟な人だ。

怒るととても怖いけど。

めったに怒ったところを見た事はないが、クエスさんがお酒飲みすぎてぶつ倒れたときは、やばかった。

いつもの笑顔なんだが、目が笑つてない上に、ただ淡々とクエスさんを数時間に渡りお説教していた。

僕ならあのプレッシャーに30分持たない自信がある。

サラさんの話はおいておいて、しつこい話ではクエスさんが一番頼れる人に違ないので、教えを請いに行く事にしよう。

クエスさんの家に行き、ノックもせずに突撃。

「クエスさん、サラさん、こんなにうは。」

「おひ、キャス坊。びつした?」

「いらっしゃい、キャスクン」

こんな小さい村にプライバシーなんでものあまり無く、大抵用事のある人の家には突撃して、いなければ探すか、そのまま待つかだ。

村全体が大きい家族つて感じだ。

ちなみに「キャス」というのは僕の名前だ。

すっかり自己紹介も遅れたが、ひとつよろしくたのむよ!

「見聞を広げるために、少し遠くまで旅に出ようと思つてゐるんです。

そこでクロスさんに相談にきました。何分村からあまり出たことがないの

サラさんがすすめてくれた椅子に腰掛けつつ答える。

ちなみに、この見聞を広げるため、といつのは、婆様と考えた旅の口実だ。

さすがに、神様のお使いとか神獣とか言いつても、トラブルの素にしかなりそうにないしね。

教会の人間に聞かれて、下手に騒がれたら面倒だといつ」と考えた。

「ふむ、どのくらいの旅を予定してるんだ?」

「隣のアルバ大陸まで足を伸ばそつかと思つてこます」

「アルバまでつて、そりやあまた随分と長旅になりそだなおい」

「あつちのほうまで行かないと、採れない薬草なんかもありますからね」

「しかし、あつちはいまだに戦争やつてゐらじこぞ」

戦争か。危ないとこはなるべく避けて通りたいというのが本音だ。

「キヤス坊も、男の子だしな! いいぜ、長旅にいるもんとか、覚えておくといい」ととか、まとめて教えてやるー!」

「さすが村一番のいい男！」

クエスさんはおだてておけばとりあえず間違いはない。

それから数日、クエスさんの家に通いながら旅に必要なものを揃え、知識を見につけ、猫さんの世話をした。

猫さんもすっかり歩けるようになり、僕の後ろをくつづいてくるものだから、村ではちょっととした人気者になっていた。

最初こそ、大きい猫っぽいにかなんて、魔物かと疑う人もいたが、「にゃーにゃー」鳴きながら人の後ろを歩く姿は愛らしく、子供を中心につらせてほないと散々言われた。

そんな感じで、出発の日まで猫さんに後ろから追われつつ過ごした。そして出発の前日、たさやかながら村のみんなが宴をひらってくれ、飲んだり食つたりと大いに騒いだ。

その翌日、出発の日には村人総出で、お見送りをしてもらつた。

「あまり急がないよ。自分の歩幅で歩いて行けばいいのよ。あなたに神のご加護があつますように、ってね。うふふ」

「男の子だからな、冒険したい年頃つてのもあると思うが、無理はするなよ。」

「ハハコのところに行つたら、顔見せてあげて頂戴ね。あの子喜ぶわ」

「水には飯をついたんだぞー。」

「何かあつたら無理せず戻つて来るんだよー。」

「猫ちゃんばいばいー。」

やれっこ煎葉をかけられたると嬉しそうに恥ずかしそうに笑う。

まあ、とつあんぐー。

「こつこつかーー。」

「こつこつかーー。」

## 第五話「纏めてみた日」

さて、街道を歩くこと数時間。

休憩がてらこの数日で学んだ事を少し整理してみよう。

まずは地理から。

といつても、僕自身そこまで詳しくは知らないので大雑把なものだけど。

まず、現在地はオーステス大陸の南に位置するイルア王国、そのまた南に位置するサイ村を北上する街道だ。

この街道をまっすぐ行くと、イルア王国南方最大の町ハロースに着く。

さらば北上すると王都シザルス、その北が北方最大の町ヒルースだ。

イルア王国の北はウルテマ学術国だ。

その名の通り、ありとあらゆる学問が集まっている。

幼馴染のコウリもここにいる。

ウルテマの北はエッカ教の広大な教皇領となつていて、巡礼地として有名だ。

ちなみにエッカ教は、数多くの神々を信仰する、多神教だそうだ。

まじめに説教を聞いてなかつたので詳しくないし、あまり興味もない。

ちなみに他の宗教というのは聞いた事が無い。

さて、教皇領のさらに北へ行くと、カリウス帝国とセラリニア同盟国がある。

この2国は長い間戦争中である。

もつとも、最近の大きい戦は3年前で、双方疲弊しきつて事実上の休戦状態らしい。

カリウス帝国から東の海上を抜ければ目的地アルバ大陸である。

アルバ大陸のほうも、戦争をやつているらしいのだが、詳しい情報が入ってくるはずもないでの、道すがら集めることになる。

とまあ、これが大雑把な地理の話で、目的地までのルートは簡単。

ひたすら北上してカリウス帝国でアルバ大陸行きの船に乗るだけだ。時間は掛かるだろうが、ルートはほぼ一直線なので迷うことはないだろう。

アルバ大陸に入つたら、田に付く中で一番でかい山が靈峰サドンらしい。

それぐらい大きい山だそつだから、現地で聞き込みすれば大丈夫だろう。

行商人のおっちゃんの話や婆様の持つてた昔の古い地図を頼りにしているので、どこまで正確かわからぬけど！

次に、種族については、婆様が昔王都のお城勤めだったこともあり詳しい話がきけた。

イルア王国は種族に頓着しない気風なので、王都あたりには他種族も訪れるようだ。

僕が人族以外で見た事があるのは、亜人族だが、彼らは多種多様な種族だ。

耳、尻尾、足、手、顔、体の中心から遠い箇所ほど動物の特徴がでるらしく、それにも個体差があり、尻尾と耳を隠せば人族にしか見えない者もいれば、顔全体が獣という者もいる。

セラリア同盟国は亜人の作つた国で大半の国民が亜人だ。なので戦争してるカリウス帝国には亜人がほとんどない。

あとは魔族もいるが、僕は見た事が無いうえに、人族とあまり変わらないため、見分けるのが難しい。

魔力が高く、体に魔力による線が紋様のように浮かび上ることがあるのでそれで見分ける。

魔力が出たついでに魔法の話をしたいのだが、サラさんいわく僕は魔力を認識することが上手じゃないらしく、魔法を使うことはできないそうだ。

昔に、幼馴染のかわいいあいつが魔法の勉強をしだしたときに、自分も習おうとしたときに聞いた。そして泣いた。

そしてあきらめきれずに、ちょくちょく幼馴染の家に顔だして一緒に勉強したときの知識を引っ張りだすと！

生物は多かれ少なかれ魔力を持っていること。また世界にも魔力が漂っていること。

魔力を認識し、自分の意思で扱うことができる者を魔法使いと呼んでること。

自分の魔力を消費しても、少しずつ世界から自分の体に取り入れて回復すること。

火、水、土、風の属性があつてそれぞれ火と水、土と風が対になつてること。

魔力は一定の言葉や文字列、形、鉱石などに宿ること。

その特製を生かして、魔法具と呼ばれる魔力を供給するだけである一定の効果を得るものを作り出していること。

魔力は人によつて一部に違ひがあり、それによつて個人を特定することに使われていること。

いまだに盛んに研究されていたり、古代の遺跡から今の時代では再現できない魔法具まで発見されるりしく、謎の多い分野のこと。

こんな感じだつたはず！

自分で自分の傷に塩を塗つてる気分だ！

結局、魔法は使えず、面白くなくなつてだんだん幼馴染の家にいかなくなつて・・・

今夜は猫さん慰めてもらおう・・・抱き枕的な意味で。

気を取り直して、魔法とは違ひけど教会の信者の中でも信仰心の高い者や神に気に入られている者は、祈りを奉げることによって、奇跡を起こすことができる。

しかし、長時間祈らないといけないこと、それでも思つた通りの効果がでるか分からぬことなど不安定な要素もある。

それを差し引いても、絶大な効果を引き起こすから、教会は大陸中に信者がいるのだろうけど。

ちなみに僕の祝福もこの奇跡の類なんだろけど、たぶん教会のよろお手軽に起こすことができるんだろう。

言語と文字については世界でほとんど共通のものが使われているといわれている。

亜人族のなかには、部族独特の言語や文字を使う者たちもいるが極少数だ。

クエスさんが世界中心近くままに周つてたときに、大体話も通じたし、文字も読めたって言つてたし。

話が通じなかつた亜人族の方たちとも、拳で大体通じたつて言つてたし。

次いで、ギルドについてはクエスさんがいまだに一応所属していることになつてゐらしいので、いろいろ聞かせてもらつた。

ギルドは大陸全土に渡り点在し、アルバ大陸にもある。

ギルド所属員への、依頼の管理、身分の保証などをやつている。

依頼については、階級制度があつて、自分の階級にあつた依頼しか受けれないことになつていて。

身分保証については、ギルドに登録するときに、教会に並ぶ情報網を持つギルドが、各地のギルドの情報を繋ぐ魔法具によつて、過去から現在までの犯罪歴等無いか厳しくチェックし、ギルド登録後も逐一情報は更新されるので、信頼度は高いらしい。

あとギルドの大きな仕事といえば、各國の貨幣の両替がある。

オーステス大陸の各國は、銅貨100枚で銀貨1枚、銀貨100枚で金貨1枚、ということになつてゐるが、国によつて貨幣の形や重量に至るまで違があるため、ギルドが両替所としての役目

も果たしている。

貨幣の田安としては、町の安宿にとまるのに、銅貨20枚、一食たべるのに銅貨5枚といったところ。

ちなみに、クエスさん、階級が高いらしく、紹介状を書いてもらつた。B以上の人なら保証人になれるので、面倒くさいチェックが省略されるらしい。ありがたやありがたや。

最後に、魔物についてかな。これもやつぱりクエスさんが詳しきつた。

けど、ドーラーンまで見てきたように語らないでください、勘弁してください。弱点とかいいです、そんなやばそつなところ切りつけるくらこなら、見たら即逃げるんで。

と、いろいろ脱線しつつ聞いた話を纏めると。

魔物は世界各地について、「プリンみたいな低級のものからドーラーンのような高位のものまで多種多様にいる。

高位のものほど知能が高いらしく。

魔物を倒すと、魔力石という石が浮かび上がる。

これは、魔道具の動力として使わるのでギルドが高値で買い取ってくれる。

もちろん、高位のものであればあるほど値は上がる。

魔物によって武器や防具に加工できる部位があつたり、肉が食用として高値で取引されたりする。

ちなみにドラゴンの肉は、腐らず、年月が経つにつれおいしくなつていくらしいのだが、大抵の人は我慢できずに食べてしまつらしい。それくらいうまい。うまかつた。クエス家の床下は食材の宝石箱やで！比喩表現ではなく。ざつぐざくだ。

あとは魔物によっては弱点、逆に効かないものがあつたりするので、クエスさん聞いたのだが。

あの人、なんで人が超えちゃいけないような魔物の弱点しか知らないんでしょうか。

もう少し低いレベルの魔物の弱点が聞いてみると、殴つたら消えたぞ、つて……

もはや武器すら使つてないし！

こじら辺にでる魔物の特徴を村の自警団の人に教えてくれて助かつた。

とつあえず、こんなところか。

当面の目標は、猫さんと僕のチカラの確認と、ハロースでギルド登録してお金稼いで旅費をつくらないといけない。

「がんばりな、猫ちゃん。」

「いやー。」

「ナビ、アーリンとか見かけたらすぐ逃げるんだよ。お肉はねこしがつたナビ、飛び掛っちゃうなあせんからねー。」

「いやあ・・・。」

「残念ねえしなーのー。猫ちゃんの親猫になら食べられるとつから。たぶん、やつと」

「いやー。」

「もしもねこじこねのこわこあるんだらうかがい。 のんびっこねまじー。」

「いやー。」

## 第六話「町に着いた日」

翌朝。

猫さんが寝ぼけて噛み付いてきたこと以外、特に問題も無く起床。ちょつと血が出たもののすぐ傷口が塞がったので、癒しの祝福も自分では常時発動してるようだ。

すまなそうにしてる猫さんに、「傷がない」と見せて安心させて、手早く準備を整えて出発。

段々と、魔物の出没頻度が高い地帯になつて来るらしいので、少し緊張しつつ歩く。

しかし、武器は腰の鉈くらいしかない。

薬草取りに行くときも、鉈一本で魔物を倒していたので、なんとかなると思つけど。

守護の祝福がどんなものか確かめないといけない。

猫さんの戦力も確かめないといけない。

猫さんには朝、どんなことができるのかだけ聞いてみたけど、それがに細かいことは分からない。

一応、「がおー」とてな感じでお口開けてアピールしてたから、口から何がすごいものをだしてくれると思つんだけど、自信がない。

不用意に、何か攻撃してもひづのもな。

腐つても鯛、小さく？でも神獣だし、底が見えない穴とか地面にあけちゃつたらいやだしね！

段々と木々が生い茂つてきた道の先に、この旅初遭遇の魔物がいた。

「ゴブリンが3体か」

ゴブリンとは、森に棲み棍棒などを振り回し動物を捕食する、1mちょっととぐらーいの子鬼だ。

集団で狩をし、ときには人間も襲う。

今回はウサギ狩りだったようだ。

両手にウサギと棍棒を持ち、こちらを威嚇して来ている。

「猫さん、がおーつてやつ、いける？」

「二ちゃん」

何がどうなるか分からぬため、微妙な聞き方になってしまったが、猫さんは「承の一鳴きをすると、お口を開く。

瞬間・・・

何かが高速で地面をえぐつていき、3匹のパッコンのうち一匹に着弾、爆発、余波で他2匹も文字通り消える。

「猫・・・ちゃん・・・?」

「二ちゃん」

なにその「どうしたの?ほり3匹吹つ飛ばしたでしょ、ストライクだよ!ほめてほめて」みたいな顔は!・

「猫さん!今の禁止、ダメ!絶対!あんな火力いらぬいでしょ!・?  
木もあんなになぎ倒して!・

「いやう・・・」

しょんぼりする猫さんを見てちょっと罪悪感。

「ね、猫さん、ゴブリン倒したのはえらいよーすごいよー！ただ少し周りの被害を考えてといつか、火力を抑え目にしないと、ね？わかるよね？」

「ニヤン」

「おお、さすが猫さんだ！えらいぞ！」

と言つて、全力で撫で回すと、すっかり猫さんも機嫌が元通り。ああ、猫さんかわいいな！もづー・

その後、何度か遭遇したゴブリンや、ゴボルトを猫さんの魔法？ブレス？で倒し、加減をマスターしたみたいだ。ついでに魔石も貯まつてきた。

ちなみにゴボルトとは、一足歩行の犬型魔物で、サイ村周辺ではほとんどの見なかつたが、器用に弓を使うものもいる。

「よしぬは、僕が前に出るから、猫さんは合図があるまで待機で。おーけー？」

「ニヤン！」

「いい返事だ、守護の祝福がどんなか試すから少し間置いて待つてね！」

守護つてことは、たぶん攻撃が効かない、もしくは効きにくい、とかそんな感じだと思うんだけど、攻撃当たるごとに神様に祈るのか？

さすがにそんな不便じゃないよな。

一応神様に「なんで説明がないんだっ！」と祈つてから魔物の前に出る。

コボルトが2匹なので、普通に倒せそつだが、どうするか。

——カツン・・・——

と、油断したところに後ろから矢が来たが、何か硬いものに当たつたかのような音を響かせ落ちる。

これは、予測どおりの効果かな・・・？

考えつつ、目の前のコボルトを無視して背後の木の陰にいる弓持ちコボルトに接近、いつきに鉈で倒そうとするも、もう一匹草葉に隠れていたコボルトが弓を猫さんに向けていて・・・射った・・・！

「猫さんよけて！」

叫んだが遅い、猫さん田掛けて矢が・・・矢が・・・？

あれ、なんでヒツチ來てるのあの矢！

どうみてもいろんなものを無視してヒツチ来きてるよーー？

なにそれ、どんな高等技術！

うお、あたる・・・！

——カツン・・・——

ああ、守護の祝福があるか。

よつヒー！

呆然としていたゴボルトの群れを簡単に倒して、猫さんの元へ。

その後、何戦かして、なんとなく守護の内容が分かつてきました。

硬くなる自体は祈らなくても常時祝福が効いてるみたいだ。

さらには、祈ることによってある一定の距離にいる敵を強制的に全部自分に向かってこさせることができるようにだ。

そして味方に向かうはずだった攻撃も、強制的に自分に向くようになっている。

なんという肉壁仕様・・・

あと、硬いことは硬いんですが、限度があるらしく、それを超えたと超えた分だけ僕にダメージがくる。

まだこのレベルなら超えた分もちょっとちぐつとするかなあ？程度で大丈夫ですが高位の魔物とかやばいかも。

「あんまり強い攻撃に当たると、自分が怪我して、すぐ治る。そしてまた攻撃されて・・・」

身につけていた物にも守護がかかっているで、服には特に傷みも無く、限度を超すと僕の肉体にダメージがくる。

これは防具を買っても意味がない気がしてきた・・・

鍛えれば限度あがるのかなあ。しかし、この場合鍛えるのは肉体じゃなくて信仰心なのか・・・！？

それから、猫さんと前衛後衛に別れてコンビプレイ！

少し、いや、かなり、誤射が心配だつたけど、猫さん、かなりの腕前？のようで僕が引き付けた魔物をスナイプしていく。

猫さんの咆哮？手加減してるから吐息？は手加減と狙いを定めるのにまだ少し時間かかるから、町でちゃんとした武器を買って自分の攻撃力もあげるか。

僕壁猫さん無双で、結局ハロースには2日目を過ぎてはついてしまつた。

「しかし、猫さん連れてはいれるのかな？」

「にゃーん？」

「いやほら、すれ違う行商の人とかも、きょっとして猫さん見るじやない。門番の人にも魔物と間違われてはいれないんじゃあと」

「「」やつ、「」やつ、「」や～～う・・・」

「おおお、お、落ち込むな猫さん！なんか言われたらペツトつてことにしごり押しすればきっと大丈夫だ！！村長さんも紹介状書いてくれたしー！」

「「」やーん、「」やーん」

神獣をペツトとか言つたらあとが怖いけど、仕方ない。

「よし、それじゃあ、気を取り直して、こきましょーーー！」

「「」やーん！」

## 第七話「町に入った日」

唐突だが、なぜ僕がいまだに猫っぽい何かであるといふの神獣を、名前もつけずに猫さんと呼んでるかといつ。

ただ単純に、神獣に名前つけるなんて怖くてできなかつただけのことである。

そんなわけで、猫さんにおちついてる。

そしてなぜ、唐突にこんな話をしたかといつと。

ハロースを囲む壁が見えてきて、いざ入門、と思つたら手前で止められた。

「止まれ……」

びっくりして、拳動不審になつてしまつ。

「止まれと言つてこらう。止まらんと力ずくで止めるぞ。……からには魔法士もいる。」

やばいと叫びて両手を上げてすぐ元に戻まる。

「ぐるるるるる」

と、僕の隣から唸り声が聞こえてくる。

「ね、猫さんストップ、ストップ！大丈夫だから、おとなしくして！…」

慌てて僕は猫さんを制止する。

「ぐるる・・・

なんとか猫さんにも止まつてもうらい、門番？さんで尋ねる。

「えーっと、この通り、止まつたんですけど、どうすればいいでしょ  
うか？」

「え、あ、ああ。俺のあとについて来てくれ。くれぐれも変なまね  
はするなよ。こちらには魔法士がいるからな。そちらの魔物にも言  
い聞かせてくれよ」

「わ、わかりました。猫さん、の人たちはがおーってしちゃだめ  
だからね！大人しくついてきてね！」

「にゃん

「（（（がおーつひなんだよーーー）））」

「えーっと、それじゃあ、キャス君は、サイ村から来たんだね？」

「はい。見聞を広めるために世界を周つてみよつと思いまして」

「ふむ。村の身分証、クエスさんのギルドへの紹介状、サイ村の村長の紹介状もある。」

身分証とは、年に一度、その地域の役人が特殊な魔道具を持つて、村を周つてその年生まれた子供全員の名前と魔力を記録したときに発行されるもので、魔力により個人を識別できるようになっている。

「町に入るのも大変だらうといつ」と、村長が持たせてくれました

「まあ、確かになあ」

苦笑いしつつ、猫さんを見る門番さん。

ちなみに最初に静止の声を掛けたのもこの人で、他の兵士さんにテキパキ命令してたところを見ると偉い人だらう。

みたところ、30台半ばで、ちょっと生えた無精ひげが似合つてるダンディな人で、雰囲気からしてとても強そうである。

「あー、紹介状には、そこの魔物はキヤス君が飼い主で、キヤス君の言ひ方とをしつかり聞く。と書いてあるが、違いないかい？」

「はいー猫さんは僕の言ひ方とをしつかり聞いてくれますし、無闇に何かに襲い掛かるところもしません」

「「やんひ

当然だ、と言わんばかりに一鳴きする猫さん。かわいいよ猫さん。

「本来なら、身分証があれば簡単な荷物チェックだけでいいんだが・  
・」

「やつぱり猫さん連れて町を歩くのはまずいですか？」

「つーむ。冒険者にも魔物を飼いならしてる者もいるが、ギルドでちゃんと認定を受けているからなあ

びつしたものか。

先に僕だけ行つて、ギルドに入つてから猫さんを迎えていけば・・・  
けど、猫さんがまた攫われたり、魔物と間違われて狩られたらやば  
いし。

「「いやーう・・・・」

「猫さん・・・・」

そんなつぶらな瞳で切なそうに見つめないでくれ……。

僕が君を見捨てるわけないだろ!…

「ふう、仕方ない。俺がギルドまで一緒に行こう」

「い、いいんですか!?」

「ああ。その猫?が人を襲つよつにも見えんしな。町に入れても問題ないだろ?」

さすが猫さんだ!その愛くるしさは人類共通の認識だね!

「おつと、自己紹介がまだだつたな。俺はハロース警備隊のグリスだ。ギルドまでだがよろしく頼む」

「ひがひがしい、お世話になります。改めて自己紹介を。キヤスと申します、サイ村から来ました。こっちの大きい猫は猫さんです」

「「いやーお」

「つむ。礼儀正しいな。つと、そつちの猫？は猫さんが名前なのか？」

「あー……はい。そうです」

「へ、そうか」

で、冒頭の話に戻る。

なんかグリスさんに微妙な顔されたな。

しかし、仕方ない。

もし親猫さんが名前つけてたのに、猫さんに僕が勝手に名前つけたら、なんかおいしく頂かれてしまつ気がする。

「あー、荷物は返すから、中身が無くなつていないか、確認しててくれ。たまに手癖のわるいやつもいるからな、嘆かわしい」と。その間に俺は報告だけしていく

「分かりました」

グリスさんが申し訳なさそうに言つてくれる、本当にいい人だ。

「大丈夫です、全部ありました」

報告から帰ってきたグリスさん「」と告げる。

「そうか、よかつた。それでは、ギルドに行くといよい。町の中央部にあるから、歩いて30分程で着く」

「分かりました。よろしくお願ひします」

「いやーん」

そして、ハロースでの第一歩を踏み出した。

ちなみにハロースには、婆様曰く10年以上前に通ったことがあるらしいが、さすがに覚えていないので、感覚的には初めての町だ。

ギルドへの道中、村とは全然違つ町の様子に見入つてしまつ。

石畳の道も新鮮だし、露店なども多く見た事も無い物があり興味が注がれる。

そこにはじゅうで大きな声が上がり、活気がある。

建物も、同じような形のものが並んでいたり、石作りのものもあり。

人も多く、獣人も普通にいる。

きょりきょりしている僕を見かねてか、グリスさんが解説をしてくれた。

「ハロースは、イルア王国南部最大の町と言われている。イルア王国はとても豊かな土地を有しているが、その中でも南部は、豊穣の神の祝福を受けていと言われるほどだ。

その南部と王都を結ぶ町として、収穫物が一度ここに集まるので、商人の出入りも多く活氣がある。治めておられるのは、ハロース公爵だ。

町の中心部には、教会、庁舎、警備隊詰所、ギルド支部、学校がある。

町の南側、じちらのほうには、商工区になっている。宿屋もじちら側にあるから、ギルドについてお勧めを聞いて見るといい。俺では、魔物同伴が大丈夫な宿はちょっとわからんのでな。

色町もあるが、間違つてはいるなよ。お前じや真っ裸にされちまいそうだ。

北は住毛区だ。

どこもそうだが、中央は高級と名のつくものが多い、逆に外壁に近づくにつれ治安も悪くなるので、気をつけよう。

まあこんなところだな。」

「なるほど、丁寧に説明してもらつて、ありがとうございます」

「なーに。俺はこここの生まれだからな。お前みたいなまどき珍しい礼儀正しいやつに、この町を少しでも好きになつてもらいたいか

「らな

「来たばかりですかけど、とっても新鮮で、わくわくしますー。」

「せうだらう、せうだらう！なんせそろそろ秋の収穫祭も近いからな。それ用当ての商人や冒険者ももうじきすると集まつてくる。更に活気がでるぞ。俺の仕事も増えるがなー。」

「収穫祭ですか！村でもちよつと前にあつたけど、ぜんぜん規模が違つてうだ」

「なんせ南方最大の祭りだからな。メインストリートを埋め尽くさんばかりの露店と、中央広場で見世物が毎年あるだ。あと半月ばかりだから、余裕があつたら見て行つてくれ」

「はー、せうしますね！猫さんもつまこもの好きですか？」

「まつまつま。グルメなのかお前ー。」

「こやーんつ」

「よーし、収穫祭までに稼いで、猫さんと腹いつぱこ食べ歩くぞーーー！」

「こやーんー。」

「元気もあつてよしー。そのためにもとつとヒザルドで登録しないことなー。」

「はーーー。」

南方最大の収穫祭を、猫さんと楽しむためにも頑張ろうと僕は決意して拳を固めた。

## 第八話「いのこの登録した日」

そして無事、冒険者ギルドハロース支部に到着。

石作りの立派な建物に冒険者ギルドの羽のマーク。

町中でも猫さんへの注目度が高く、みんな遠巻きに見てくるのぢちよつと疲れ気味の猫さん。そんな猫さんも可愛いよー。

「(J)Jがハロースのギルド支部だ。しかし本当に猫さんは大人しいな。途中で急に子供に触られても堂々としてるし。JJたちが冷や汗かいだぜ」

「(ニ)や(ニ)やんー!」

町のことを聞きつつ歩いてるときに、後ろで「大きい猫さんだー!」とこう声と共に、女の子が猛ダッシュして猫さんに抱き寄ってきて来たときは僕もびっくりした。

たぶん、周りの人もかなりびっくりしてたと思う。

そして動じない猫さん。

そういうえば、村で散々背中に乗られたりしてたから、慣れてしまっているのかもしれない。

すぐにお母さんらしき人が走って来て、子供引き剥がして、謝つて

帰つて行つたが、女の子は名残惜しそうだつたな。

さすが猫さん。その抱き心地で都会の女もいちじろだぜ！

「とりあえず、入るか！」

グリスさんの号令のもと、いざギルドへ！

ギルドを入ると田に入るのがひとつひとつ広く仕切られて並んでいるカウンター。ちらほら冒険者が座つてギルド職員さんと話をしたり、カウンターに魔石だしたりしている。

カウンターの前のスペースは広く取られており、テーブルと腰掛がある。何人かの冒険者がくつろいで談笑している。

扉側の壁にはところ狭しと紙が貼つてあり、あれがたぶん依頼書だろ。冒険者が田にして見ている。

扉右はすぐ壁になつてゐるが、左のほうは、カウンタースペースと軽く仕切られてテーブルが並んでおり、飲み食いしてゐる人がちらほらいる事から、たぶん食堂か何かだろ。

グリスさんがカウンター前スペースの腰掛に向かいつつ言つ。

「田の前のカウンタースペース一番右が登録専用だから、あそこいつてこい。俺はこっちで待つてる」

「すみません、行つてきますね」

さつそく行こうとするも、なんか視線を感じる・・・！

具体的には僕の下後方への視線でした。

さすが、猫さん！その愛くるしさは冒険者も釘付けね！

しかし、むせ苦しい男どもが凝視するなんて、猫さんの何かが減つてしまひー。

急いでカウンターへ。

「ほんにちは。ギルドへの所属登録と、魔物の登録にきました。」

ギルド職員の制服をきた、都会風なおばさまが対応してくれたみたいだ。

「ほんにちは。所属登録と、魔物登録ですね。まずは所属登録から行います。登録にはイルア銀貨1枚掛かりますが大丈夫ですか？」

「はい、持つてます」

首から下げて懐にしまつてある財布から銀貨を一枚だして渡す。

ちなみにお金は、いくらか婆様から借りている。

「はい、確かに頂きました。こちらの代金は万が一登録ができないといった場合にも、返却できませんので」「承ください」

「分かりました」

「あとは、身分証はありますか?」

「はい、あります。あ、あと紹介状もあるのでだしたほうがいいですか?」

「紹介状もお預かりしますね。Bランク以上の方の紹介状なら、すぐ登録できますよ。それでは確認してきますので少し待っていて下さいね」

「はい、お願ひします!」

緊張している僕に優しく微笑んで奥に行くギルド職員さん。

おばさまがあと一〇歳若ければ僕は・・・僕は・・・!!

「ハヤシ!..」

お、おおつかじょ、冗談だよ猫さん。僕は猫さん一筋だよー?そ

の筋10年のベテランだよ！？

「ニヤーン？」

本当だつて！よーし今日も一緒に寝よー！

「ニヤー。ニヤン」

ふう、機嫌直してくれたみたいだ。

と、猫さんと同じやれないとおぼさまで再登場。

「身分証の確認がとれました。あと、紹介状のほうも魔力印からSランク、クエス氏の物であると確認がとれました」

魔力印とは、承諾や証明のために自分の魔力と専用の魔道具を使って押すものだ。

つて、あの人Sランクなのかつ！

・・・ああけど不思議じゃないか。床下的にも。

Bが一流、Aが英雄、Sより上は化け物という話は間違つてなかつたのか。

「それでは、身分証をお返しします。あとは、登録作業が終わるまでの間に、ギルドについて説明しますね」

「お願いします」

「はい。まずは、ギルドカードについて説明します。今、確認作業が終わって、ギルドカードの作成を行っております。

ギルドカードは、ギルド所属を示すカードとなつております。高レベルの身分証となつております。各支部のギルドで使える他、ギルドがある国家への入国が可能となつております。魔力によつて識別されますが、盗難されても悪用されることはありませんが、紛失すると再発行に約10枚の銀貨がかかりますので、大事に扱つてください。

また、どこの国においても、犯罪等で手配されると、ギルドカードは失効になります。刑が終わりますとまたお作りすることができますが、再発行扱いになりますのでお気をつけください。

次に、ギルドランクと依頼について説明します。

ギルドランクとは、冒険者の方々の主に戦闘における力によつて、下はGから上はSSSまであります。皆様最初はGからのスタートとなつております、その方のランクにあつた依頼を10個以上達成することによつて、次のランクへ上がることができます。例外的に、ギルドマスターが認定した場合には、ランクアップが可能です。

依頼は、各ギルドに依頼板がありますので、そこに貼つてある依頼書から自分に合つた依頼を選び、カウンターまでお越しください。自分のランクより上の依頼を受けることはできません。下の依頼を受けるのは自由ですが、あまり下の依頼ばかり受けますと、注意を受けますので気をつけてください。

万が一、依頼に失敗した場合、ペナルティーが発生します。重大な失敗や、何度も失敗をするとギルドランクの降格、またギルドカードの失効がありますので注意してください。

また、依頼内容によつては、戦闘力を必要としない、特殊依頼があります。それについては、依頼書にランク分けはなく自身の判断で受けることができます。「ちらももちろん、失敗のペナルティーがありますので、お気をつけください。

依頼を達成なされた場合には、ギルドカードに細かい依頼内容と共に記録されますので、それを基に指名依頼をギルドから出される場合もあります。ほとんどの指名依頼は、特殊依頼に分類され、通常より高い報酬が用意されていますので、受ける受けないは個人の自由となつてますが、受けていただくとギルドと、より良好な関係が築けるかと思われます。

万が一、依頼内容に不備があつた場合には、ただちにお受けになつたギルドに報告をお願いします。そのクエストはキャンセルされ、確認をとつた上で、準備にかかつた費用なども返却されることがあります。

次に、両替について説明します。

両替は各国じの支部のギルドでも行われておりますので、もし国外に行く、「予定がありましたら、」ご活用ください。

次に、買取について説明します。

ギルドでは、魔力石、魔物の特定の部位について、買取を行つております。どちらの買取値段も、後ほどギルドカードと共に、お渡しするギルドガイドブックに載つておりますので、詳しくはそちらで確認して下さい。ただし、買取値段は参考値段ですので、それより上下することが多々あります。お気をつけ下さい。

ギルドに関する全ての事柄につきましては、カウンターまでお願ひ

いたします。この説明は全て、後ほどお渡しするギルドガイドブックに細かく載つておりますので、一度田を通しておいていただきますよ、お願いいたします。

最後に各支部の、ギルドの見分け方ですが、全てのギルドに羽のマークの看板を出しております。こちら、『どこまでも飛んでゆける』冒險者の方々を表しております。我々はどこまでも飛んでゆけるように、皆様方のサポートをやつしていくきますので、どうぞよろしくお願いいたします

「はい…よろしくお願ひします…」

返事はしたもの、田が回つねつだ。

いつぺんこは覚えれないな、あとでちゃんとガイドブック読もう。

「はい、それでは何か質問ありますか？」

「えーっと、魔物登録に関しても、説明してもらつていいですか？」

「あら、そつちは登録時説明マニュアルに無かつたから忘れてたわ

なんといつマニュアル！

「ほんっ。説明の前に。魔物登録には、イルア銀貨一枚が必要ですか？」

「はい。これでお願いします。」

またもや、首から下げた財布から銀貨を出して渡す。

はやく依頼こなさないと、まだ少しあお金あるけど懐が心配だ。

「はい、確かに。それでは、魔物登録についてご説明いたします。魔物登録をなされると、連れている魔物があなたの保護下にあるものとして扱われます。ギルドカードにその旨が登録され、ギルドがあるどの都市に魔物を連れて入つても、制限が掛かりません。ただし、魔物が犯罪を犯した場合などは、あなたにもその罪が及びますのでお気をつけください。

もちろん、魔物を連れての依頼達成も、あなたの依頼達成とみなされます。魔物死んだ場合、「ご報告いただければご本人の意思により、ギルドランクの格下げも行えますので、覚えておいてください。魔物が逃げた場合や、逃がした場合、ギルドへ速やかに報告してください。

登録には、とても厳しい審査があります。頑張ってください

「はい。ありがとうございます。頑張りますー！」

ここでミスすると、猫さん送り届けるのが非常に大変になってしまふ。

「それでは、もうギルドカードもできてると思いますので、少々失礼します」

やつこい残して、奥に行くおせさまを囁送る。

「「ひらが、ギルドカードとギルドガイドブックになります。先ほど言いました通り、再発行には銀貨10枚かかりますので、大事に扱ってください」

「はい、ありがとうございます」

手のひらサイズの銀のカードと、分厚い本を預いた。

「さて、続いて、魔物登録審査を行います」

「はいー」

よーしー!がんばり!ゼ猫ちゃん!

「「ひーちゃんーーー」

## 第九話「続・いのちの登録した日」

「試験は裏の広場でやりますので、すぐ右手のほうの扉の前でお待ちください」

扉の前に立つとすぐ「ん、鍵が開いた音と共におばさまが田の前に現れる。

「いがらの廊下から裏手に行きますので、着いてきてください」

「はい！」

「こやん！」

長い一本廊下をわたり再度扉を潜る。

そしてギルドの建物の裏の広いスペースに移動。

木人形なんかもあるので、修練とかに使うスペースなのかもしれません。

そして、中央には50台くらいのおじいちゃんが仁王立ちしてゐる。

「あちらの方が魔物登録試験の試験官ですので、試験を受けてきてください。また後程会いましょう!」

「はー、行つて来ますー!」

と詰つわけで、僕と猫さんはおじこさんの前へ緊張しながらも足を運ぶ。

「魔物登録試験を受けに来ました、キャスと申します。」(つづけ) 猫さんです」

「(汗)やんつ」

「ふむ、礼儀正しいの。わしは魔物登録試験、試験官のバードと申す。よろしくな」

「はー。よろしくお願ひしますー!」

おじこさんの霸気がずいぶん怖い、雰囲気で圧倒されてしまいそうだ。

猫さん、ねらいにちからをーー!

あと神様もできたらお願ひします。

「二」の試験は、様々な状況下で、魔物が主人の言うことを聞くか、人に襲いかかることがないかを見極めるためのものだ！いろいろな状況を再現するため、とても時間がかかる。そして一回でもミスをすると一週間、再試験はできない。また、試験内容も毎回違うので気をつけるようだ。

それでは、試験を開始する！！！」

「はーーー！」

「二」やーんっー！」

バードさんの号令のもと、長く厳しい戦いがはじまった。

まずは、普通に魔物が主人の後ろをついて歩くかどうかを見るテストを受けた。

そこから、どこまで細かい命令を聞くかとか、どこまであいまいな命令を聞くかとか、バードさんの指示で僕はとにかくいろいろな命令を猫さんとした。

そのあとも、どのくらい強い衝撃まで攻撃と認識しないか等々、多種多様な試験を受ける。

・・・

僕たちの戦いはこれからだ！

試験があまりに長く、僕も猫さんもくたくた、終わったときには口が傾いていた。

「よし、試験は無事終了じゃ」

バードさんが試験中なにやら記入していたボードを置いて僕らに向かって言ひ。

「は、はー」

「二や、二やーん」

「早速結果発表じゃが。ここまで息のあつた人と魔物を見るのは初めてじゃーおめでとう、文句なしに合格じゃーー！」

「や、やつたーーー！」

「二や二やーんっーー！」

その場で疲れも忘れて猫さんと抱きあひ。

もつ僕ら夫婦だよね、猫さん！

ひとしきり猫ちゃんと喜びを分かち合ひ、バードさんと共に建物の中へ再度移動する。

僕はカウンタースペースまで戻り、バードさんはこれから登録作業をしてくれるやうだ。

「おう！ キャス君、試験どうだった？」

「グリスさん……すみません、お待たせしてしまって。試験受かりましたよ……いま登録待ちです」

「一応仕事だから、気にするな。それより、おめでとう。よくやったな！」

「ありがとうございます！」

「いやん！」

「それだけ息ぴったりだからな。そんなに心配じゃなかつたが、受かつて何よりだ、それじゃあ、俺は一応確認だけ取つて報告に帰るとするか」

「遅くまでありがとうございました！」

「おう」と言いつて、そのままカウンターに行くと、おぼさまと、

3言葉を交わして、グリスさんが戻ってきた。

「よし、それじゃあな！何か困った事があつたら、すぐそこが警備隊の詰所になつてゐるから、俺の名前だせばすぐ駆けつけるぞ！」

「分かりました！何かあつたらお願ひします！」

「おう、じゃあな！しつかり稼いで、収穫祭楽しむんだぞー！」

出ていったグリスさんの背中にお辞儀をする。

お使いに出て初めての町で、こんないい人にで会えるなんて幸先いいな！

すぐにカウンターに呼ばれて、おばさまからギルドカードを受け取る。

「裏の記載事項に、魔物認定が書かれておりますので、魔物関係でなにかあつた際は、そちらを提示ください。」

「分かりました」

「何か質問等」  
「させんか？」

「えーっと、魔物同伴が大丈夫な宿屋ってありますか？」

「そうですね、昔から魔物を連れている冒険者はいますので、馬小屋等ある宿屋ならば、相談すれば大抵泊めもらえますよ。ただ、魔物と一緒に部屋となると、かなり高い料金になつてくると思われます」

「そうですか、わかりました。ありがとうございます」

「いえいえ。もう日も傾いてきましたので、宿屋を探しにいかれるといいでしょ。依頼に関しましては、ギルドは24時間開いてありますので、都合のよろしい時間にお越しください。

それでは、本日はお疲れさまでした。」

「お疲れさまでした。お世話になります！」

そして、ギルドを出るともう田舎も大分傾いている、早めに宿をさがしたほうがよさそうだ。

人ごみを避けつつ、宿街に向けて移動してると前方から来ていた小さい人影にぶつかった。

「おつと、すみま・・・せん？」

謝りつとしたときには、すでにその人影は雑踏の中に消えていた。

はたと気づいて、ポケットをあたるも財布がない。

スられた？！

さすが都會・・・なんといつ早業。

とりあえず、首からさげている銀貨が入っている財布は無事だつたのでもだいいか。

婆様に言われた通り、銅貨と銀貨は分けておいてよかつた・・・。

しかし、とても幸先がよかつた日の最後に、じんなけちがつくなんて。

「はあ、ついてないなあ」

「こやへん

猫さんありがとう、元氣出ますー。

「よし、気を取り直して、宿探しにいりやー。」

「こやへんー。」

## 第十話「小屋で寝た日」

やつてきました宿街。

日も落ちてきて、そこらかしこに明かりがともって、宿屋兼酒場といつところが多いみたいでにぎやかだ。

馬小屋がある宿屋を中心に、交渉して周るとじよつ。

「じんばんは、部屋の空きはありますか？」

さつそく田に入った宿屋に入つて聞いてみる。

「お、いらっしゃい。・・・あー、魔物はちょっとひじやあ

僕の背後を見て言いにくそうに告げる店員に、一いちも申し訳ない気がしてくる。

「そうですか。分かりました。よければ、魔物が大丈夫な宿屋を紹介して頂きたいのですが

「おお！それなら、大樹の枝亭がいいぞ！安いしサービスもいい。魔物も専用の小屋がある。獣人の夫婦がやってて、うちをでたら左に曲がって、ずっと行くと左手にあるぞ

「分かりました、丁寧にありがとうございます」

お礼を言つて、早速大樹の枝亭を手指す。

「お、あそこかな」

宿の建物の横に魔物用であるつ小屋があるので、間違いないだろ？

「「」んばんは。魔物連れなんですが、部屋の空きはありますか？」

入つてすぐのカウンターにいた獣人の女性に声をかける。

「こりっしゃいませ。魔物連れだね。部屋は空いてるよ。魔物小屋のほうも今は空っぽなんだけど、一応ギルドカードで魔物登録されてるか、確認しないと泊められないんだよね」

「あ、登録は済ませてあります。これがカードです」

「はー・・・確かに。それじゃ、合わせて一泊銅貨30枚になるよ。飯は別にかかるから、うちで食べるなら少し安くなるよ」

「それでは、とつあえず10日分で」

「はいよ、それじゃ、銀貨3枚に確かに受け取つたよ」

「えつと、キヤスつて言つます、ヒツカは猫さんです。よろしくお願ひします」

「ヒヤーん！」

「はつはつは、賢そうな魔物だね。私はリリーム、見ての通りの宿屋の女将さね。で、あっちでのキッチンを仕切つてるのが旦那のガリオンや。いい男だよー。食堂で注文とつてるのが娘のリリーンよ。可愛いけど手は出すんじゃないよ」

リリームさんは、獸の耳と尻尾が特徴的な緑の髪の30台女性だ。

ちらつと左手の食堂の奥に見えるガリオンさんは、一見獸人に見えないが、背が高く筋骨隆々のスキンヘッドだ。

リリーンさんは確かに可愛いが、10歳くらいの、母親そっくりの耳と尻尾で緑髪の子だ。

「これがあなたの部屋の鍵、2階の一一番奥だよ。で、こっちが魔物小屋の部屋の鍵、これは入つて一番手前だよ。魔物を入れたら外から鍵をするようにね」

「分かりました」

「ヒヤー。ヒヤー。ヒヤー。ヒヤー。ヒヤー。」

「ねへ、ねへ。じつした猫さん、そんな引っ張りないでくれ」

「いやーん。いやいや、いやいやー。」

「ううと、なんだ、何かわすれ……て……

ハツ！

「めんよ猫さん…今日は一緒に寝ようって言ったじゃないか！」

「すみません、リリー・ムさん。できれば猫さんと一緒に寝たいんですけど、できますか……？」

「は？ 魔物と？ あんた正氣かい！？」

「え、ええ。猫さん見た目通りうつと大きいだけで猫ですし。賢いので！」

「はあ。やうかい。それじゃ、魔物小屋のほうなら今夜つけだし、一日くらいならいこけど。毎日はだめだよ？ あと鍵は閉まらないよ？」

「わかりました、すみません、わがまま言つて」

「なーに。あんた、なかなか面白そうだしね。明日、怪我しないことを祈りなさいな。あと、今日の分の部屋代は無にしてやるから」

「ひ

「えー? カビ・・・」

「子供が遠慮なんてするもんじゃないよ! いいから大人の厚意は受け取つときな!」

「はい! ありがとうございます!」

「はははは、素直でよろしご。それじゃ、小屋のほう準備してから、ご飯まだなら済ませやがな」

やつ面つてコリームさんが小屋のほうへ。

僕と猫さんは食堂のほうへ移動。食堂はこれから込み合つたうな感じなので、適当な席に座つてメニューをみつつ、リリーンちゃんにわざわざ注文をする。

「いらっしゃいませ。あの、宿のお客さんですよね。私リーリンっていいます、よろしくお願ひします!」

「僕はキヤス、こつちは猫さんつて言つんだ。よろしくね。こまさらだけど、魔物もこじで食事して大丈夫なのかな」

「あ、はい! 大丈夫ですよ。」

「そうなんだ。教えてくれてありがとう。田舎物から出てきて、初めての都会だからいろいろ教えてくれるとうれしいな

「もちろんです!」

そんな会話のあとに、今日のお勧めと、魔物用の「ご飯」を注文。ちなみに猫さんはなんでもおこしく食べるし、量も僕と同じでいいので、注文が楽だ。

普通の魔物だと、食べれないものとか量とか指定しないといけないので、料金計算とかで結構注文にも時間がかかるらしい。

「お待りいただきます！」

やつじつ考えてみると、皿の前におこしそうなシチューが登場！

「いらっしゃ本日のお勧め！ナナメ鳥のシチューです！そしてこちらは猫さんのご飯です！」

猫さんの前には、綺麗に切られたお肉と野菜、フルーツがそれぞれの皿に並んでいる。

「おおー、おいしそうだ。頂きます！」

おこしご飯に、今日一日いろいろあったこともあり、大分空腹もあって、瞬く間にシチューが胃袋に消えていった。

横を見ると猫さんもおこしゃつて、フルーツの最後の一切れを頂いてるところだった。

そして、一人揃つていじ馳走さま。

お金を払つて宿のカウンターに戻ると、リリー・ムさんとが待つていた。

「小屋の準備はしついたよ。鍵も一応渡しておくけど、外側からしかからぬからね。最近寒くなつてきたから、毛布おこといたから使いな」

「何から何までありがとうござります」

「気にあるこじやないよーしつかり休みな」

「はー、おやすみなさい」

「ええ、おやすみ」

といつわけで、小屋に移動。

部屋に入るといつ、綺麗に藁が敷き詰められており、上には毛布、ランプが置いてある。

「今日せこひあつたねえ、いこいとばつかりじやなかつたナビ。まさかスリヤれるとな・・・」

「二二ちゃん」

「ナビ、ギルドで登録もできたし、ここ出舎こもあつたし、総合的にほここ田だつたんじやないかな」

「二二ちゃん」

「ナビだね。なんの寝よつか」

毛布を猫さんと被りつつ、猫さんに抱き着いた体制で就寝。

空が白みがかつたる、物音がするので起きると、隣に猫さんがおり、ちよつとも部屋のドアから入ってくる猫さん。

その口こはせ、気絶してこる子供が咥えられていて・・・

「あれ・・・一田こじて、認定取り消しの危機! ?」

番外「ヒロインは・・・」（前書き）

ヒロイン予定の一人をだしてみるテスト。

## 番外「ヒロインは・・・」

僕の名前はユウリという。

オーステス大陸にあるイルア王国の南、サイ村の出身だ。

昔は凄腕冒険者、今は凄腕村人の父と、昔は可憐な貴族令嬢、今は美人で料理上手な母の3人家族だ。

母親似の容姿、父譲りの赤髪が特徴で、父にはよく「将来ママみたいな美人さんになるぞ!」と言われて育つた。

今思えば、父のこの口癖が僕に多大なる影響を与えていたのかもしれない。

幼少期のころ、男の子の遊びをするより、女の子と遊んだほうが楽しかったのをよく覚えている。

僕が女性ならまったく問題ない話であったのだが、実際問題僕は男性であつたために、幼いながら苦悩した。

子供のコミュニティと言うのは馬鹿にできず、人生のほとんどを村で過ごす村人にとって、子供時代の関係とは将来に渡る関係となる。

そこまで難しいことは当時考えていなかつたが、男女の区別がつくようになるにつれ、仲間はずれや悪口を言われるようになった。

そんなときに彼に出会つた。

彼は、村の薬師のおばさまの養い子で、当時は村に来たばかりの6歳くらいだったはずだ。

いつもおばさまの後ろを歩き、拙いながらも薬師の手伝いをしていた。

おばさまが、何度か子供たちの集団のほうを搔きして、「遊んでおいで」と言つても首を振るだけで、結局おばさまの後をつけたのを、なぜか今でも鮮明に覚えている。

おばさまは、元々名のある薬師で、10年くらい前にサイ村に居を構え、小さい村に薬師自体珍しく、腕がいいとなればなおさら珍しく、とても有難い存在であるために、村では尊敬を集めている。

そんなおばさまの養い子である彼、キヤス君おばさまから時も離れず、仕事を手伝っていた。

当時、子供たちも、いきなり来たよそ者をどう扱つていいか、分からなかつたのだろう。積極的に遊びに誘つたりといつこもなかつた。

しかし、子供というのは親を見ているもので、おばさまが村で瞬く間に尊敬を集めると、その養い子であるキヤス君も子供たちの興味の対象となり、彼ももともと人懐っこい性格をしており、気づいたときには村の男の子たちと遊んでいる姿を目にしたくなった。

そんなんある日のことだ。

その日、女の子たち遊ぶために、遊び場に向かっていた僕は、村の年長の男の子たちに田をつけられ、「お前もサイ村の男なら、度胸

試しをやれー」と、川の少し高めに出張つてこぬ島の上に連れていられた。

今にして思えば、氣になるあの子と、男の僕が遊んでこるのが氣に食わず、周りに人がいないタイミングを見計らって、少しいじめてやろうと思つたのもしれない。

散々ヤジを飛ばされ、段々泣きたくなつてどうしていいか分からなくなつていき、眞づいたら川に飛び込んでいた。

そこまで深くも、流れも早い川ではないので、普通の子供ならおぼれる事は無い川なのだが、いかんせん僕は、ほとんど川遊びもせず、またこのとき、薄いながら服を着たままだつたので、思つように体が動かず、それはもう慌ててしまつた。

だんだん意識が遠のく中で、最後に見たのはキャス君の必死に顔だつた。

氣がつくと、薬の獨特な匂いが漂うベッドだった。

横を見ると、父と母とおばあちゃんがいて、父が僕が目を覚ました事に眞づくと慌ててひき戻された。

「おこー。コウリが目を覚ましたー。おばあちゃんー。」

「あひ、本當ね。けびクエス、嬉しいのは分かるけど邪魔だからどうなさい」

「やうね、あなた。いきなりそんな顔で迫つたら、コウリがびつくりしてまた氣絶しちやうでしょ」

父がしゃんとして、離れていく。

「氣分はどうだい？ コウリ。痛いところとか無いかい？」

「痛いところはありません」

「やうかうか。それはよかったです。いきないうちの坊と子供たちがコウリを担いできたときにはびついたかと思つたけど」

「あ、そうござれば、僕、溺れて……？」

「やうだね、コウリ！ 服着たまま川に飛び込むなんて！」

「あなたは、少し黙つていなさいね」

母の一睨みで父はまたしゅんとなつた。

「溺れてたところを、たまたま川沿いで遊んでいたキャス君たちが助けて運んでもくれたのよ」

「キヤス坊は見所のあるやつだと思っていたが、さすがおれの見込んだ男だな！」

「キヤス君が・・・」

「それで、何で溺れていたの？」

「つむ。夏とはいえ、服着たまま川に飛び込むなんて、やつぢゃいかんぞー。」

父母に真剣に見つめられ、村の年長の男の子たちに連れられていかれ、度胸試しをさせられたことを話した。

「よしそうに行つてくる

剣呑な気配をまとつて父が立ち上がつた。

「落ち着きなさい、あなた。ユウリが怖がってるわよ

「むう、しかしだな！」

そこへ、扉を開け村人が駆け込んできた。

「おばばさま！子供たちが腹痛起つて大変なんだ！まだ3人だけ  
で、いつのもんだつたらまずいだんつてじじさま方が言つんで、  
家まで行つて診てくれんか！」

「落ち着きなさい。どこの子が腹痛を起つているの？」

「ええと、うちの息子と、コマサのどこの甥男と、タンダのど  
ろの次男だな」

「ん？なんかそいつ、覚えがあるな」

「コウリに意地悪した子だけじゃない」

「おおー！そつだそつだー！天罰でも当たつたかー！ですがコウリ、神に  
も愛されてるなー！」

「クエスはちよつと黙つてなさい。センリ、あなたのどこの息子  
は、何か悪いもの食べたか聞いている？」

「お、おお。おらも聞いたんだが、夕飯前だつたから、朝も昼もお  
らと同じ物たべとるから、違うものと言えば、おばばさまのどこの  
の坊から貰つた団子くらこみたいだ」

「そつ。それなら害はないわ。腹痛もすぐ治まるわ。今日あの子が  
摘んでたのが、たまたま便秘に効く弱い薬草でよかつたわね」

「ど、どこのことだ、おばばさまー。」

「つちにある薬草は摘んできたら、ほとんど私の部屋におこてあり  
ますからね。あの子には、危ないから私の部屋には入らないように

言つてありますから。あの子が使える薬草はその日摘んできたやつしかなかつたのでしょうか？

「そ、そりぢゃなくてだな！なんで坊につひの息子らが一服盛られてるんだ！」

「それは私の後ろの人たちに、聞くのがいいかと思つわ

それから、母が説明し、父が怒り、センリさんが縮こまり、結局コムサさんとタンダさんのところに行つていろいろ、おはなし、したそうだ。

僕は、一日ばばさまのところに泊まることになつて、父たちが出て行くのを見送ると、ばばさまに横になつてているようだいわれて、毛布にくるまり口を閉じると必死にこつちに手を伸ばすキャスくんが思い浮かんだ。

なぜだか胸もどきどきしている。

も、もしかして？さ、キャス君は男だし、僕も男だし。

けどけど、キャス君は溺れている僕を助けてくれて……。

なぜか仕返しまでしてくれて……。

けど・・・だけど・・・でも・・・。

一人になつて、急にとめどなく思考が流れしていく。

なんでも「こな」じゃあられないのか。

キャス君の顔を見て、お話をされはまつさぬじやないか。

キャス君に会いたい、お話ししたい！

そつ懇こんど、話しが聞こえてきた。

「キャス、あなたは何をしたのか分かつてますね」

「はー・・・『めんなさ』」

「理解して反省してこようですが、強くは言いませんが、薬師として教えていることと、このよつなことに使つためじやなことを覚えておこへね」

「はー・・・」

「ここの話はここまでね。コウシは密室で寝てるから、様子を見てらつしゃー

キャス君・・・、僕のために元してくれたの。今

ああ、どうしよう。わざわざ会いたいと懇ついていたけれど。

今は余りのが怖くなつてきた。

それでも扉は開いて。

「コウリ、入るよ。」

キヤス君がベットの脇まで歩いてきたが、僕は結局寝た振りをしてしまった。

僕が寝てるのを確認すると、彼はむせむせ笑った。

「コウリをいじめた馬鹿三人はしっかり懲らしめないとから、安心して。婆様には怒られたけど仕方ないよね。反省はしているけど、後悔はしていないってやつだ。」

キヤス君は、まま出て行こうとしたので、つこひきとめてしまった。

「キヤス君ー助けてくれてありがとう。」「めんな、僕のせいでおばばさんに怒られて・・・」

「あれ、コウリ起きてたのか。どういたしまして。仕返しは僕がしたくてしたことだから気にしないで」

「うん、うれしかったから。ありがとう

「それならよかつた

やさしく笑いながら、見つめられて僕はビビり頭に血が上るのを感じた。

それから少し沈黙が続き、焦った僕は、やつらの苦惱もあり、とんでもないことを言ってしまった。

「きや、キヤス君！ 僕は本当に君に感謝してるんだ。お礼に、ぼ、僕が大人になつたら、キヤス君と結婚するー。」

言つてから、じぶんでもすゞしくことを言つたと気づいたけど後の祭り。キヤス君が何か言つたけど、毛布を被つて恥ずかしさのあまり丸まついていたら、そのまま寝てしまっていた。

けど、このとお告白して、僕ははつきり自分の気持ちに気づくことができたんだ。

次の日、両親に連れられて家に帰宅。

父は何でも、「ちょっと一週間くらい山籠つてくれる」と言つて、なぜか例の3人と一緒に山に向かつていった。

僕は、昨日のことがぐるぐる頭を巡つていて、ぼーっとしてしまつてこると、母にどうしたのか聞かれて、結局全部暴露してしまつた。

そうすると、母が魔法に関する本を何冊か引っ張りだしてきて、その一文を読んでくれた。

『古代の遺跡から発見された魔道具には、使い方が分からない物や、欠損があり効果が安定しない物などがある。私自信も、遺跡から発掘されたとある魔道具の研究をしていたところ、暴走させてしまい、性別が変わってしまった。そのときは、もう一度暴走させることで、性別を戻すことができたが、そのあとは何度も、そのような効果を得ることはできなかつた』

『こういう魔道具が、世界にはあるみたいよ』

その日から、僕は母に魔法の勉強を教えてもらひようになつた。

それはもう、遊ぶ時間すら惜しいほどに必死に勉強した。

キヤス君も魔法に興味をもつて、一度母に習いに来たけど、母がキヤス君には才能がないとはつきり言つてしまつたため、何度か来ただけで、全然来てくれなくなつたときだけは、母を恨みもした。

そして、12歳になり、あの本を書いた魔法使いがいるウルテマ学術国の魔法学院への留学が決まり、出発の日。

勇気を出して、キヤス君の手を握り、

「僕のこと忘れないでね。」

と言つて、村を出発した。

キヤス君も、涙を溜めて首を大きく振つてうなずいてくれていたので、きっと想いは通じてる。

僕は、決意と共に村を後にしたのだ。

番外「ヒロインは・・・」（後書き）

だが男だ！

## 第十一話「弟子ができた日」

と、とりあえず、落ち着け僕。

「「いやーん?」「やん」「やん」

猫さんは前足で「わらわを呪こしてへる。

「「こでしょ、じりじり、ほめほめ。つて感じですね猫わざ。」

確かに、大きい獲物だら「カビー」だら「カビモ」…。

「「わはーーー!」「やーん、」」

なぜか慌てて子供をわらわらおつた…・・・お?猫わざの口になんか挟まつてゐな。

「「れは僕の財布?あれ、つて」とせりの?・・・?」

夕方のスリカ!-!

灰色の迷彩柄のローブに、背丈も回つ。

「猫さんは犯人を捕まえてきたのか」

「『』やーー・『』やんー・『

さすが猫さんだ！—庄の上の山に家に子供は3人、犬一匹、静かに  
暮らすやつー。

「ありがとう猫さんー明日も一緒に・・・あ。けど毎日せダメって  
言われたからな・・・」

「『』やーう・・・？」

ああそんな悲しそうな顔で鳴かないでー

「よ、よし、『』やー・『』やーん

「『』やー・『』やーん

ふはは、よしよし可憐こやつめー

「・・・・・」

「おっヒ、スリ（仮）ちゃんが起きてしまへ。

といつあえず、縛つておくか。

「ハハん？あれ・・・」「ハハル！・・・？」

起きたな。

「寝てたらこきなつ大きこ獸が田の前に・・・」

「ハヤーん」

ビツチャラ猫ちゃんは寝てこねといふを連れていきたいし。

「つー?ま、魔物!?わ、私を食べてもおこしくないよー?・肉付き  
もよくなーいしー。」

「あー、混乱してるとこ悪こけバ・・・」

「ーーーあんたは・・・。ハツ!お、オレを攫つても金にはなつこだ  
ーー、こんな貧弱な男じや、値もつかないからな!」

猫さんに気がついた、慌てる子供に声を掛ける。

しかしのその返答は見当違いでびっくりだ。僕が人攫いにみえると  
いつのか。

「いやーん

前足で猫さんが慰めてくれる。

僕がんばるよー！

「別にお金を要求するわけじゃないけど。僕の財布を斯ったのは君  
だよね？」

「な、そ、そんなことしてないぞ。夕方はスラムにいたし！」

盛大に自爆する子供に、何故か僕は怒りがわいてこなかつた。

「ああ、うん。夕方、ね・・・まあ、君と一緒にこんなものも出  
てきたんだけど、僕の財布だから返してもらうよ。小銭しか入れて  
ないけど、一応大事な人から貰つたものだからね」

「す、好きにすればいいだろーお、オレは何もしらないぞー！」

「あー、はいはい。まあ、あんまり人さまの物に手をつけないようにな。この子が加減間違えるつてこともあるかもしかなかつたし」

猫さんをなでつつ、一応忠告しつべ。

「お、オレだつて人を見て商売してゐる。今回はたまたま、運が悪かつただけだ！」

「……お前そんな正直モノなくせによくスリなんてやつてゐるな

さすがの僕でも、この自爆つぱりには呆れるばかりだ。

「な、あ！……だましたな！」

「いやいや、勝手にしゃべつただけじゃん！」

「へ、ひむきこひむきこー。お、オレを警備隊に突き出すつもりか！」

？

「いやいや、財布じたい諦めてたけど、猫さんが見つけて持つて帰つてくれただけで、君は猫さんがついでに持つて帰つてきちゃつた？感じなんで、もう帰つていいくけど、取り返しづかなくなる前に犯罪はやめて、職を探したほうがいいと想つよ」

昔、都会に住んでたじいさんが村について、いろいろ聞いた話の中に、手癖の悪い子供がたまたま手を出したのが冒険者の棲で、子供の腕一本消えた、なんて話をしたからなあ。

しかし静かだ、何か言い返されるかと思つたのに。

子供の様子を見ると、「つむじで震えていた……

「何も知らないくせに……スラムの親なしの子供が、一人で生きていくのがどれだけつらいか！スラムの子供なんて、雇ってくれるのもつと危ないといふか、色町の店くらしさーまだ、スリをして口ミを漁つていたほうが長生きできるー。」

涙を浮かべて叫ぶ姿を見て、かなりショックを受けた。

自分と同じか、少し年下の子供から、そんな言葉がでてくるなんて・  
・

僕は、両親はいなかつたけど、ずっと婆様に守られて生きてきた。

だから、知らないことがたくさんある。

なのに偉そうに、職を探せと言つのは軽率な発言だったな。

貧しい人みんなに職を探すなんて、僕にはできない。

けど、関わってしまったのなら、せめてこの子は助けたい。

取り返しのつかなくなる前に……

「職を探したほうがいいなんて、軽い気持ちで言つたのは悪かつた」

「あ、いや、お、オレも、財布盗んでおいて、偉そうにわめこいでごめん・・・」

「いや、気にしてない。けど、取り返しのつかなくなる前に、やめてほしこってのは本心だ」

「お、オレだつてせめれるならせめてるー!ナビ、他にできることがない・・・」

「僕が、お金を稼ぐ方法をおしえるよ」

「はあー?お前が!?

「」「ひの見えても、凄腕薬師の弟子なんだ。ハロース周辺で採れる薬草と、薬の作り方をおしえるよ。冒険者向けに作つて、露店にだして売れば稼げるはずだ」

今日、ギルドの行くところに露店の品物をみたけど、結構簡単な傷薬やらがそこそこの値段で売つてたし、どうにかなるはずだ。

最悪、僕もそれで稼げると思つたし・・・・・

「な、なんでもそこまでしてくれるんだ?お、オレに返せるものなんてないぞ?」

「うーん。軽率な事言つて傷つけたお詫びと、大事なことと気づか

「せてくれた御礼かな？」

「なんだよ、それは・・・けど、教えてくれるなら、翼いたい・・・」

・

まだ少し疑い顔だが、別にいい。これから信じもらひえばいいんだ。

「よし、決まりだ。それじゃ、細かい話は宿でしきりか、部屋もとつてあるから」

「え、お金なくて馬小屋で寝てたんじやないんだ？」

「あー。猫さんと添い寝するために小屋で寝てただけで・・・」

「そ、そうなのか」

ひ、引かれた!!

「ど、とつあえず、移動しようかーーそもそも朝食の時間だらうーーおひるよー。」

「いいのーー?」

「僕の指導は厳しいからねーーしっかり体力つけないとね

おっと、すっかり忘れてた縄を解いてつと。

あ、もうこえぜ血口紹介も忘れてた！

「宿に行く前に。僕の名前はキャス、冒険者だ。いっちは相棒の猫さん、器量よしの猫っぽになにかだ。よろしくな！」

「いやーん」

「お、オレ……じゃない。私はレカです。南のスラムに住んでます」

「ん？ もしかして女の子？」

言われて見れば、そつかなつて感じだが、喋り方があれだと全然分からなかつたな。

「うん……はい。普段は、男に見られたほうがいいので、男のふりをしてるんだ……です」

「なるほどー。あと無理に敬語じゃなくていいよ」

無理に敬語を使うレカをみて少し笑つてしまつ。

「い、いこの？」

「いいよいよ。ただし、僕のことは師匠と呼ぶよ！」

「し、師匠？分かった！キヤス師匠！」

「師匠・・・なんて甘美な響きなんだ！！」

「よし、それじゃ、食堂までこいつがー！」

「はい、師匠！」

## 第十一話「からまれた日」

宿の食堂で「」飯を食べると、リリームさんに部屋の鍵を貰う。

そのときに、レカについて聞かれたので、僕が薬師だと「」ことを話して、その弟子と「」とだけ伝えておいた。

そのまま部屋に入ると、狭いながらベットと机があつたので、僕は机の椅子に腰掛け、レカをベットに座らせて話をした。

「まず、レカにはある程度、ゴブリンくらい倒せるだけの力を身につけてもらいたいんだけど、現時点で倒せるかな？」

「私、町の外には出た事無くて。魔物を見るのも師匠の猫さんがはじめて……」

ちなみに猫さんも部屋にいる。

リリームさんに、「あんたのところの魔物はやたら行儀いいわねえ。普通、魔物は寝てるときには人が近くによつたら無条件で吼えるから、宿とは別の小屋なのに、あんたのとこの子は、昨日夜様子見にいつたときに、ぜんぜん吼えないで、ただジーっと私を見てるだけだったのよ。そんだけ躊躇できるなら、部屋のほうで一緒に寝てもいいわよ。ただし、『うるさかったら小屋に逆戻りだけどね！』と言われて、晴れて部屋で一緒に寝るようになつたのだ。たぶん、僕が今日も猫さんと一緒に寝ようと企んだことなんて、お見通しだつたんだろうな……。

しかし、これで今日からも一緒に寝れるよ猫さん！旅に出てからずっと一緒に寝てたからね、もう僕猫さんなじゅ夜も寝れない体に・・

「師匠？」

「ハツ、ちゅうと蓄え」としてた。『めんめん。とりあえず、僕もそこまで蓄えがあるわけじゃないから、今日せつすぐギルドの依頼なりを受けて、できればお金稼いでおきたいから、なるべく町の外の簡単な依頼を受けて、道中薬草についての説明とか、戦闘についてを教えていこうと思ひ、ここまでいいかな？』

「はいー。」

「へり大きな町の周辺だからといって、薬草を取りに行くのに襲われないと限らないので、『プリン』は倒せるよなって貰わないといふ。

「よし、次は、レカの装備についてだけ、なんか武器になるようなものは持つてる？」

「えっと、何かあつたときのために、ナイフなら一応、寝床にある

「」

「そっか、それじゃ、後で取りに行こう。あとは防具は、『プリン』くらくなら気にならないでいいけど、あとで服と靴は一式揃えようか

「え、このままじゃダメ？」

「お金は出すから。ボロボロの服と靴じゃ怪我するし」

藪の中を歩いたりするので、しつかりした服と靴じゃないとたちまちボロボロになってしまいます。

「うー、分かったよ」

「じゃあ、まずはレカの服と靴を揃えて、それからレカの家に行つて、ギルドにいこうか」

レカの了承を聞いて、僕は今日の行動予定をレカに伝える。

「あれ？ もしかして、師匠も私の寝床ぐるの？」

「ん？ そのつもりだけど、だめなの？」

興味もあるので行つて見たいのだが、レカは微妙の反応を返してきた。

「い、いや、いいけど。スラムは危ないから」

「い、見ても、猫さんは強いから、何かあっても平氣だよ」

「にゃん！」

猫さんに倒せないような人間がいるとすれば、町自体が危ない。

「そつか。うん、わかった。けど、寝床すごいぼろいからな！ 驚くなよな！」

レカが何度も念を押して言つてくる。しかし、スラムと名のつく場所に、ボロ家ではなく、普通の家が立つていたらそつちのほうが驚きだ。

「はいはい、わかりました。それじゃ早速行こうか

「はーい」

「いやーん」

それから、朝の商工区を周つて、冒険者御用達っぽいところで、とりあえず安い靴と服を購入してそのままレカに着せる。

レカは最初恥ずかしそうにしていたが、着替えたあとは嬉しそうにはにかんでいたので、僕としても得するものがあった。いい笑顔です。

次に、レカの家にいくために南スラムに入る。

商工区とは雰囲気ががらつと変わつて、なんとも暗い感じだ。

地面にそのまま寝ている人も目立つ。

ちょっと行くとすぐに、家といつか小屋といつか廃屋といつか、そんな建物が見えてきた。

「ここが私の寝床だよ

「あーうん。引っ越そうか」

見た瞬間僕の中でレカの引越しは決定した。

「えー? 急にどうしたの師匠! ?」

「うそ、これはさすがに」

ない、女の子の住む場所では断じて無い。

「だから、ほんこって言つたじゃん!」

限度と言つものがあると想つんだ。

「僕と一緒に宿でいい?」

レカの抗議には取り合わず、僕はどうあえずの宿を提案する。

「え、もう引っ越し越すの決定なの! ?」

「うん。ちゃんとした環境じゃないこと、技術についての身に着かないよ。」

驚くレカに適当ないいわけを返す。

「いや、薬つて別に寝床は関係ないんじゃ?」

「師匠の言葉に反論しない! お金なら出すから、とつあえず宿に引っ越しやう?」

もし嫌だと云つても強引に連れ出す気満々である。それくらいはひどいと思つ。

「うー、分かつたよ師匠。びつひしり、こゝもそろそろ危ないと思つたから、引っ越しと思つてたし。お金は借りとくだけで。あとで絶対返すからー！」

「分かつた。薬で稼げるようになつたら、返してくれればいいからだろ？」

受け取る気などあまりないのだが、いつ云つとけばレカも納得するんだ。

「それだと結局歸匠におんぶに抱っこだけど……。約束だからねー！お金稼いだら、絶対受け取つてよー！」

と愚つていたら、レカに念を押された。なぜばれた！

「はいはい。それじゃ、ひとまず荷物まとめて、大樹の枝亭に行こうか。そのあとギルドに行け！」

それから、十分もしない間にレカの荷物が纏まつた。僕は、レカのあまりの荷物の少なさにびっくりして声を掛けた。

「荷物それだけ！？」

「うん。こんなところに何か置いててもすぐ無くなるしね

一抱えしかないレカの荷物を受け取り移動する。

自分で持とうとするのでふんだくつてやつた。

「そつか。それじゃあ、行こうか」

廃屋を寂しそうに眺めるレカの横顔に、それ以上は聞かず宿へと向かおうとすると、急に声を掛けられた。

「おい、レカあ。久しぶりだなあ。稼ぎはまだ?ちゃんとい、お・し・じ・と・ど・してるかあ?」

いかにもな奴がにやにやと笑いながら、レカに話しかけて来た。

「ん? おい、そっちのにいちゃんはだれだよ? 寄か? というといつお前も後ろの穴売るよつになつたのかあ?」

あ、なんか、もう「ぐいライライしてきちゃつたな! どうしてくれようか、このチソピッカ……!

「(師匠、落ち着いて。私が話するから、ね?)」

小声でレカに言われたので、爆発寸でのところで黙る。

「ちよつと、昔の知り合いが尋ねてきただけだよ。ここに、今は冒険者しててね。ほり、この通り、魔物連れていこうやつてるみたいでわ」

僕の後ろにいる猫さんを指差してレカが言いつ。

「ぐるるるるる」

猫さんもチンピラが自分を見てくると低く唸つて威嚇する。

さすが猫さん、僕の心を感じ取ったんだね、僕らは一心同体だ。

チンピラは、唸る猫さんを見ると、ぎょつとして、口早に「お、おう、そりゃよ。にいちゃんも、冒険者かなんか知らないけど、あんまこじで大きい顔するなよな！んじゃ、俺はもう行くぜー」と、言つて去つて行つた。

それを見送りながら、レカはおかしそうにしている。

「あいつ、ガリストって言つて、ここらの裏を取り仕切つてるやつの息子なんだ。まあ、息子がいっぽいいて、その中の一人なんだけど。あいつ、息子の中じや実力なくて、あんまり大きい顔できないから、スラムでだけ、あんな態度なんだ」

「なるほどね。あんまり係わり合ひになりたくないタイプだつてことは分かつたよ」

「そうだね。弱いものいじめしかできない奴つて、ここでも陰口叩かれてるよ」

「かわいせうに。まあ、そんなやつの」とせ置いといへ、とつあれ  
ず宿に戻らうか

「はーい、師匠」

嬉しそうに返事をするレカを弓を連れて宿にもどったのだった。

## 番外「ヒロインが・・・」

私の名前はレカ。

ハロースの南スラムに住む孤児だ。

もともとは二つ少しだけ北に位置する、色町に娼婦の母と一緒に住んでいた。

母は教育熱心だった。「あなたは私みたいになるんじゃないよ」といつのが母の口癖だった。

父はおひょ、母にやのことを尋ねるとあまりいい顔をされなかつた。

昔、酔つた母が

「あなたのお父さんは、貴族さまだったのよ。あなたがお腹の中にいると伝えたら、名前考えて、絶対に向かえに来るって言って、少しのお金を置いて、それつきり。薄情な男さ。貴族なんてみんな、平民を・・・」

そのあとは延々と愚痴が続いた。

結局、父のことを聞けたのはそれつきりだったし、それ以降聞くつところ気も失せたのだった。

父はいなくとも、母の愛を感じ、生活は苦しくも、雨風を凌げる家

があることはとても幸運であったことを知るのは、母がお密ともめて殺されたと知ったときのことだった。

その日、いつも帰つてくる時間に母が帰つて来ず、心配になつてきたときのこと。

家の前から私を呼ぶ声が聞こえて、急いでドアを開けに行くと、そこにはお隣の部屋のお姉さんが立つていた。

お姉さんも娼婦で、母と職場も一緒だった。

そんなお姉さんが急いだように、息せき切つて私に告げた。

「いい！？落ち着いて聞きなさい。あんたのお母さんが死んだわ。たちの悪いお密さんにからまれてね。もう娼館では、あんたのお母さんが悪いってことで話がまとまつてしまつているわ、お母さんは全然悪くないのにね。

お母さんは、娼館に借金してたから、あなたをその形に連れていこうと、娼館の使いがすぐにこの家に来るわ。いますぐ、最小限大事な物だけ持つて、逃げなさい！

お母さんの死体は、スラムに捨てられると思ひけど・・・。できるならスラムには近寄らないほうがいいわ。

こんなことしかしてあげられなくて、ごめんね。あんたのお母さんには恩がいっぱいあるのに・・・。

私はもう行くわ。すぐに逃げるのよ？いい？分かったわねー！」

茫然自失の私に、お姉さんは念を押して帰つていった。

『氣づいたときには、南スラムを彷徨つていた。

そして、何時間か彷徨い、私は母を見つけた。

裸で雨に打たれ、冷たくなった母を。

その死体にすがりつき、ひたすら泣いたが、氣づいたら眠つており、起きても動かない母を見て、その死を実感すると、急に不安に押しつぶされそうになつた。

悲しくて、怖くて、寂しくて・・・。

どんどん不安になつていった。

「おい、譲ちゃん。こんなとこで何してやがる

いきなり声を掛けられ、振り向くと、人相の悪い、ぼろぼろの服を着た男がこちらを見ており、どことなく剣呑な雰囲気に飲まれた私は、一目散に駆け抜けた。

ひたすら走つて、走つて、たどり着いたのは一軒の廃屋だった。

そこで一晩明かして、また母のところにいたのは、母の死体

は無くなっていた。

スラムに住むようになつてしまらくして知ったのだが、あそこは死体置き場で、わけありの死体があそこに放置され、お金をもらったスラムの人人が処理するのだという。

人間なにがあつても、お腹は減つて、けどお金は無く、手元にあるのは母からもらつた数冊の本と着るものくらいだつた。

結局、その日は母と共にきたことのある古着屋に服を売つて、露店で食べ物を買つて食べ、廃屋に帰つて寝た。

しかし、そんな生活が長続きするわけもなく、本も売つたが、そのお金も無くなり、途方にくれていた。

そこに、当時、南スラムの子供をまとめていた子が来て、私をスラムの子供の寝床になつている一角に連れてきたのだ。

なんでも、昔お世話になつたスラム出身の人には頼まれて、ずっと探してくれていたそうだ。

その昔お世話になつた人とは、隣のお姉さんだつた。

そして、リーダーは私に寝床をくれ、スラムで生きるための様々なことを教えてくれた。

仲間もできた。

仲間と共に、盗みもした。

生き残るために必死で『//』を漁つた。

しかし、仲間はどんどん減つていった。

甘い言葉を鵜呑みにして、娼館に身売りしたり、チンピラに使い潰されたり、犯罪で捕まつた者もいた。

警備隊に捕まつた仲間はまだましなほうで、冒険者にちょっかいだして捕まつたり、ハロースの裏を取り仕切つているやつらに捕まつた仲間は、怪我をしたり、ひどいものは帰つてこなかつた。

リーダーもそのうち娼婦になり、スラムには顔見知りがいる程度で、仲間と呼べる奴は消えてしまつた。

また孤独になつたが、仲間たちに教えてもらつたスリの技術があつたので、食つに困らないくらいの稼ぎはあつた。

そのうち、私も女っぽくなつてきて、何度か襲われそうになり、女ということを隠すために、口調を変え、髪もぱつぱつ切つた。寝床も定期的に変えるようにした。

そんなある日、私はいつも通り、仕事に勤しんでいたら、たまたま田舎モノっぽい男を見つけた。

どうみても力モドで、雑踏の中を右往左往していくところを『お仕事』した。

その瞬間、男の後ろに大きい獣が見えたが、すぐに雑踏に紛れ込んだ

だったので、いったいなんだつたのかは分からなかつた。

しかし、それが運命の出会いだつたのだ。

番外「ヒロインが……」（後書き）

ヒロインが3人目。

猫、男、幼女……なぜこうなった……

## 第十二話「初依頼を受けた日」

宿に入つてすぐ、リリームさんには部屋の空きが無いか聞いたら、呆れ顔をされてしまった。

「あんた、冒険者成り立てでしょ？そつちの子もお金もつてるようには見えないし。2人とも個室で大丈夫なの？2人部屋で、魔物も部屋のほうで寝るなら、問題起こさない限り、結構安くするわよ？」

「僕はそつちでもいいけど、レカは女の子だし「安くなるなら2人部屋でいいです！」・・・本当にいいの？」

「師匠は信用してますし。安くなるならそつちのほうが絶対いいよ」

「レカがそう言つなら。2人部屋でお願いします」

なんか、無条件に信用されるのはくすぐつたくもあり、嬉しいな。

そんなわけで、ほとんど使わなかつた一人部屋から二人部屋に移動。一人部屋よりちょっと広いスペースにベットが2個あり、ベッドの間にはテーブルがある。

自分の荷物を片方のベットに置いたら、なにやらベットでうれしそうにじろじろしているレカに話掛ける。

「まだ、そろそろお腹だし、ギルドまで行ってお腹食べてから、依頼を受けようとももうんだが、どうかな？」

「はーい」

「なんか、やたらうれしそうだね、レカ」

「だつて、ベットなんてすこい久しぶりなんだもん。へへー」

また、じるじだすレカを引きずりて部屋を出た。

ギルドに行って、レカと猫をひと食事をとると、依頼の張つてあるボードの前にく。

階級ごとに別れている依頼と、特殊依頼をぎつと見て、よさそうなものを探していると、ちょうどランクでゴブリン討伐の依頼があつた。

内容も、ハロース近くの村に棲みついたゴブリン少數の討伐というお手ごい具合。

そつそく、カウンターにギルドカードと共に依頼書を出して行く。

「「」のクエストを受けたいのですが

「はい。ただいま確認いたしますので暫くお待ちください」

そういうて、職員さんはカードと依頼書をもって奥へといって、すぐにもどりてくる。

「いらっしゃら、カードをお返します。ゴブリン討伐の依頼を受領いたしました。一度、村に寄つていただいて、詳しい場所などの確認をしてください。そして、依頼が完了したら、確認してもらつてください。確認が終わりましたら、こちらの依頼書に村長の魔力印を押してもらつて、それをギルドに提出していただければ、依頼達成となり、報酬が支払われます。説明は以上ですが、何か質問ござりますか？」

「大丈夫です」

職員さんは綺麗な声で長い台詞をすらすらと言つてのけた。さすがプロだ。こういうプロフェッショナルな人を見ると、ギルドは信用できそうだなと思つ。逆に信用を得るためにこうこう教育もしつかりしてゐるのだろうか。

「それでは、こいついらしゃいませ」

「はい！こいつてきまー

職員さんの綺麗なお辞儀に見送られて、猫さんとレカを連れてギルドを後にした。

「ゴブリンが多くても一〇匹程度とのことで、特に用意するものも無く。

早速、西門からハロースの外へでて、依頼書の村へ向うことにする。歩いて2時間程度の距離だったので、道中少ししか薬草について話ができるなかつたけど、レカは飲み込みが早く、僕なんかよりよっぽど頭がよさそうだ。

「これが、擦り傷に効く薬草。こいつはただの雑草。ちょっと見分けにくいけど、葉っぱの先が違うからね。覚えて置くよう」

「本当だ、こいつのほうが葉っぱが丸いんだねー。」

「当たり。間違つても怪我人に雑草を刷つこまないよつて気を付けるんだよ」

「はーい」

とまあ、こんな風にしてあつといつ間の2時間だった。

そして村が見えてきて、柵に近寄ると、若い村人に止められる。

「なんだお前らは！」

明らかに猫さんを見て同様する村の人。こんなにかわいいのにどこに同様する部分が・・・はつ、猫さんのあまりの可愛さにか！

「ギルドの依頼で来ました、冒険者のキャスと申します。村長さんはいらっしゃいますか？」

馬鹿なことを考えつつ真面目に返答する。

「おまえが？・・・ちょっと待つて、村長を呼んで来る」

と言つて、若い村人は走つて村のほうへ。

すぐそこ、30台くらいのたくましい男の人がある。

「私がこの村の村長の、『テイルです。』のたびは依頼を受けてくださいありがとうございます！」

「は、はい。」ひびひび~。

やけに低姿勢の村長に、驚いて変な返しをしてしまつ。

「はっはっは。いや、魔物を従えているなんて、お若いのに大したものですね」

なるほど、猫さんをつれているからか。まあ確かに猫さんは強そうな雰囲気もあるしなあ。僕から見れば、愛くるしい雰囲気のほうが百倍だが。

「いや、まだまだ駆け出しの身です。この子も、力で従えているわけではありませんので」

あまり過大評価されるのは嫌だしなあ。

「なるほどなるほど。しかし、そのようなお強そうな魔物を連れている冒険者の方が、依頼を受けてくださるなんて、心強いがぎりですよ」

聞く耳を持つてもらえない！

仕方ない、仕事の話をじょい。

「それはもうと、「ブランが出るやうですが。具体的にどの辺りで、

出るのでしょうか

「おお、さっそく退治してくださるのですな。ゴブリンは、村の裏手の山に縄張りを作つておりまして、何度も村人でも山狩りをしたのですが、ゴブリンと侮つていたら、若い者が命を落としてしまいます。これ以上は被害をだしたく無く、ギルドに依頼したのです。数のほうは大体10匹くらいだと思います」

「なるほど、わかりました。早速行つてきましょう。終わつたら、また戻つてきますね。確認のほうはどうしようか?何か切り取つて持つてきますか?」

「それでは、ゴブリンの右耳をお願いします。それとできれば、終わつましたら、ここに警備の者がいつでもいますので、それに私の伝言を任せてもらつてよろしいですか?言いにくいくことですが、そちらの魔物を怖がる村人もありますので。もちろん私は、人に従つている魔物の有用性を分かつてはいるのですが、村人の中にはそういういたものばかりでもないものとして」

なるほど、だから今も門前なのが。

しかし猫さんの愛くるしさをこの村で宣伝できないのか。

「分かりました、それでは行つてきます」

「はい、お願ひします」

そして、村の裏手の山へ。

「むー、猫さんこんな可愛いのに、怖がるとかありえないよー。」

レカがむくれて僕に言つてくれる。

「二ちゃん」

「さすが、僕の弟子ーよくわかってるなーしかし、猫さんはやらな  
いぞ！」

「師匠つて猫さんの」とになると、人が変わるよね

「狂おしいほど愛してるからねー！」

「二ちゃんー」

変なものを見る田で弟子に見られた・・・

「ののけ姫」のくじこにして、仕事をしようつか

「はあ。ナビ師匠、この山結構広いし、見つけるまで時間がかった  
ら、最悪野宿かな、村入れないし。」

真面目にお仕事をしようとするど、なぜか弟子にため息を吐かれた。

「ハーン、たぶん猫ちゃんなら探せるぜー。」

困ったときの猫ちゃんとこのわせで、猫ちゃんはパソコンの気配を探してもうひとつに。

程なく、猫ちゃんが一鳴きすると、着いて来ことわんばかりにお尻をふりふり歩き出したので、着いて行く。

そんな雄雄しい猫ちゃんも可愛いやー。

トコッパしてると、パソコンが集まつて何かを食べてこらへんと遭遇。

息を潜めて、確認をとる。

「猫ちゃんはいつも通り、後ろから狙撃でおねがい。レカは今回は猫さんその後ろに」

「ハーンやー。」

「はー、歸れー。」

「やれじや、やくつとけいわか」

作戦会議もすんで、やつやくパソコンの群れにお祈りして突撃。

おれ、この依頼が終わつたら、猫さんと教会行つてお祈りするんだ。  
・。

そんなことを考えてる「ひに終」。

猫さんはどんどん狙撃も早くなつてきて、本当に肉壁しかすること  
が無くなつてきた。

そのうち、僕が突撃するまえに猫さんの狙撃でおわりそりで怖い。  
ともあれ、依頼も済んだので、魔力石を回収し、戻ろうとするとい、  
レカが呆然と立つている。

「どうしたの、レカ？」

「ハツ！？師匠！なんなの、あの猫さんの攻撃！猫さんみたいになつ  
ことできる魔物いっぱいいるの！？それなら、町から出たくないん  
だけど！それに、師匠も！全部敵引き付けたのに、攻撃全然当たつ  
て無いし…どうなつてるの！？」

レカが興奮して言つてくる。

「いや。猫さんみたいのは早々いないから安心しなさい。町の周辺  
にはそこまで強いのはいないよ、いてもすぐ討伐されるし。猫さん  
は特殊だから、あんまり気にしなくていいよ。僕も結構鍛えてるか  
らね。ゴブリンの棍棒くらいじゃ怪我しないから、逆に余裕もつて  
避けれるだけだよ。ああ、けどレカは無闇に攻撃受けちゃダメだか  
らね、痛いと思うから。それよりも、ゴブリン一匹程度ならレカで  
もなんとかなりそうだったでしょ？」

実際当たつてもどうもないのは知つてるので、心に余裕を持てれば、クエスさんにたまに鍛えてもらつていたこともあり、それなりに対処できる。

「あー、はい。けど、猫さんにあまりに驚いて、そこまでちゃんと見てなかつたけど」

「なるほど。まあ、十四を一人で、つてなるときついかもしれないけど、慣れてくれば対処できるし、頑張つていこうね」

「分かつた、頑張るよー。」

「元氣があつてよろしいー！それじゃ、村に戻つて魔術印もらつてかいりましょ」

「はーー」

つてな感じで、比較的楽に初仕事を終えたのだった。

## 第十四話「再度呼び止められた日」

ゴブリン討伐の後、村の門にいた村人に頼んで、村長さんを呼んでもらつた。

驚いた様子の村長が来て、耳を確認してもらい、魔力印を押してもらつた。

どうにも口の中といふこともあってかなり時間がかかると思つていたらしく、短時間で終わつてしまつたことに恐怖したのか、せりに低姿勢になつてしまつた村長さんに見送られ、帰途につく。

まだ明るいが、ハロースに着く前に暗くなつても困るので、少し急ぎ足で町へ。

そんな帰り道で、ちょうどゴブリンが一匹だけひれひりしていたので、レカに倒させること。

「ゴブリンはそこまで力も無いし、知覚範囲も狭いから、相手が気づくまで忍び足で近づいて、気づかれたら一気に近寄つてナイフで切りつければ大丈夫だよ。首か胴体の中心を狙えれば、ほぼ一発で倒せるよ。万が一はずしても、ゴブリンは動きも遅いから、落ち着いてもう一回狙えばいいから。さあ、いってみよっ!」

「い、いきなりだね、師匠。さすがに怖いんだけど・・・」

レカにアドバイスをして背中を押す。

「やらないと覚えないからね！少しぐらい怪我したって、僕のや」  
いきすぐりであつて、この間に治るから、頑張つとして

「二ちゃん

「ほら、猫さんも激励してるから」

だれかを応援する猫さんもかわいいよ！

「うー。分かったよ。行って来る」

恐々といった感じで、レカがゴブリンに向かつて歩いていく。

結構な速度で近づいて行くほど、全然気づかれない。

そして、そのまま一気に間合ごとを詰めて、一閃。

首を切られ、倒れるゴブリン。

いやいやいやいや！あんな怖がつてたくせに、やけにあつさう、しかも切りつけの瞬間まで気づかれずに倒しちゃったよ・・・

さすが、元スリストでも言えぱいのか・・・

そんなレカが走つて戻ってきて・・・なぜ僕に抱きつく！？

「怖かったよー！見つかった瞬間目が合つてーーもう何がなんだか

！」

「傍から見たら完璧だつたんだけじなあ」

本当に綺麗に倒してしまつたのだから、教えることなどどんどん減つていきそうだなあ。

「怖いものは怖いんだよー」

「安定した生活のために、慣れるしかないなー。今回は良くできました!」

と言つて、頭を乱暴に撫で回し励ます。

猫さんも、テシテシとレカを叩いて慰めているようだ。

なんとこつ愛くるしやー。

そこからば、特に何も無くハロースへ帰還。

「ハロースよ、私は帰ってきた。猫さんとの愛を成就せらるために・・・」

「何言ひしの、師匠。せやべ、ガルダへ報せに行ひゆ

「あ、うそ」

少し台詞の氣分に浸たまつとしていたら、弟子が冷静に先を急かしてきた。

ちよつと寂しい思いを抱きながら、門を潜ひつつするとまた声が掛けられる。

「ヤー」の冒険者、止まれー！

「」のパターん、昨日と同じー！

そつ思い振り向くと知つた顔だった。

「グリストさんー！」

「よーー早速友達とお仕事か？」

『』さへに手を上げて返事を返してくれるグリストさん。

「えーっと、友達じゃなくて弟子です」

「え、弟子？」

「はい、僕が薬師なので、その弟子なんですね」

「ほー、そうなのか。昨日は見なかつたが、あの後弟子をとつたのか？」

「あー。そんな感じですね」

さすがに猫さんが拉致してきたとも言え無いし。

「ほつ?なるほど」

グリスさんはレカのほつを見る。

「坊主、名前はなんて言つんだ?」

「えつと、レカっていいます」

レカは怯えているようだ。グリスさんの足元を見て話している。

「グリスさん、レカは女の子だから」

「おつと、これはすまんな」

「いえ、そんな」

「いつも、レカはグリスさんが苦手みたいだな。

わざわざから、少し拳動不審だ。

「さて、キャス君。ちょっと時間あるか? もちろん、お嬢さんも一緒に。お茶くらいだぞ!」

グリストさんはたずねてる割には有無も言わせない感じだ。

「えーっと、分かりました」

グリストさんに連れられて三人と一匹で門の詰所へ。

部屋に入つてすぐ、グリストさんが切り出す。

「早速だが、レカちゃんはスラムの子か?」

「……はい、そうです。私はスラムに住んでました」

レカはうつむいて答える。しかしながらグリストさんがそんなこと知つてゐるんだらいい。

「やつぱりか」

「えつと、グリストさんはレカと知り合いなんですか?」

「いや、一方的に知つているだけだな」

「それって・・・」

「ああ、何度か追いかけっこしたことが、な」

あちゃー、どうするかな。

最悪、別人で通すか・・・？

「勘違いするな。別にそのときのことをビリーフおうとは思つてない。そもそも、スラムなんものがてきて、子供が食うに困るような暮らしを強いられてるのは、俺たちのせいでもあるんだからな。さすがに、現行犯でもないのに、捕まえようとは思わない。そうじやなくて、スラムの子つてことは、身分証が無いだろう? キャス君と一緒にならいいが、一人で町から出ると、入れなくなるぞ。」

「え・・・! ?」

「ど、どうしたらいいんでしょう、グ里斯さん」

グ里斯さんから予想外の言葉が連発して同様する僕とレカ。

「うーん。ギルドカードがあるなら大丈夫なんだが。あれ作るのも、身分証いるしなあ。ランクB以上で本人が直接紹介すれば、身分証いらないらしいが。あとは、身分の高い人に保証してもらえば、庁舎でハロースの身分証を出してもらえると思うが」

「Bランクはさすがに・・・いや・・・うーん、最悪クエスさんを呼びに戻つて連れてくれば・・・。身分高い人の知り合いなんて

いないしなあ」

クエスさんなら来ててくれそうだけど、迷惑かけるのもなあ。

「まあ、何にせよ、一人で町からださなければ大丈夫だ。じつちで  
も少し調べて見るから」

そう言つてレカを見つめるグリスさん、本当にいい人だ。

「ありがとうございます。大樹の枝亭に泊まつてますので、何か分  
かつたら教えてください。お願ひします」

「ああ、期待しないで待つててくれ。嬢ちゃんも、怖がらせて悪か  
つたな」

僕が頭を下げる時、手を上げて答えてくれたグリスさんは、レカの  
ことも気にしてくれているようだ。

「いえ、そんな…」つむぐ、いろいろごめんなさい…」

「はつはつは。何のことかわからんな」

「あ・・・、ありがとうございます…」

「まだ、何もしてないけどな。頑張つてみるさ」

本当に、町に入るときグリスさんに出会えてよかつたと思つ。

再度、二人でグリスさんにお礼を言つて町に入る。

しかし、身分証か。

レカは、ハロース生まれだもんなあ、僕が町を出る前にどうにかしないとな。

まあ、まだまだ、教える事が山ほどあるし、僕自身稼がなきゃいけないし、祭りもあるから、先の話ではあるけど。

「し、師匠！ 身分証だけど、師匠と一緒に旅しても、い、いいよ？」

「うーん。下手したら戦争地帯を通るかもしれないから、危ないよ。それにどっちにしろ、身分証はどうにかしないといけないしね。ちやんとするから、気を使わないでいいよ、安心して」

ビーヒが無理してるようなレカを安心させようと笑つて言つた。

「べ、別に気をつかつてるわけじや」

レカが小声でぼんぼんしゃべつてゐるのだが、よく聞こえない。

「ん? 何? 聞こえなかつた」

「なんでもないよーー。」

「な、何をむくれてるんだよー。ほら、飴ちゃんあげるから機嫌直せ」

「むーー！」

「トト～」

猫さん、なんだいーーの味れたよつな鳴き声ーー。

結構、身分証の話はうやむやに、ギルドへ向かつのだった。

## 第十五話「初報酬を受け取った日」

ギルドに入つて、早速手続きをして報酬を貰いに行く。

Gランクの報酬は難易度にもよるが、だいたい銀貨一枚が相場だ。僕が受けた依頼は、Gランクの中でも比較的報酬がよく、銀貨2枚が報酬としてもうえ。

カウンターへ行き、魔力印を押してもらつた依頼書とギルドカードを出す。

「依頼が終わつたので、確認お願いします」

「はい、わかりまし・・・た・・・?」

この依頼を受けたときと同じ職員さんのカウンターにいつたのだが、用が合つとなぜか職員さんの動きが止まる。

「いらっしゃり、お昼にお受けいたしました、ゴブリン討伐の依頼でよろしいですね?」

おお、さすがプロフェッショナル、覚えていたのか。

「はい、それです」

「わ、わかりました。確認してまいるますので、少々お待ちください」

なぜか、驚いたようにして職員さんは早足で奥へ向かう。

少しすると、職員さんが慌しく戻ってくる。

「魔力印の確認がとれました。初依頼達成おめでとうございます」

祝われつつ、ギルドカードと報酬を貰う。

「ありがとうございます」

「Hだけの話なのですが、あの依頼は討伐魔物の難易度はGなんですが、魔物の数が多く、居場所も分からないので、冒険者として経験の無いGランクの方では、時間がかかる部類の依頼なんですよ」

「そうなんですか？」

「そうですよ。あの難易度の依頼をいくつか受ければ、ギルド長の認定をもらつてのランクアップも可能になると思いますので、ぜひ頑張ってください」

「はい、分かりました、頑張ります」

確かに僕も猫さんがいなかつたら、山をひたすら歩いて探すはめになつてたしなあ、そう考えるとかなり早く終わつたのか。

まさこ、猫さんさままだ！

しかし今は、ランクアップよりレカに薬を教えるのと、身分証をどうにかしないといけないしなあ。

Bまで一息にランクアップできれば、ランクアップ狙うのもありだけど。

あとは、お金も貯めないといけないしなあ、出費が多いし。

そりゃねば、溜め込んだ魔力石があつたな、全部換金しちゃおう。  
魔力石がまとめて入れてある袋をカウンターに出して。結構溜まってるなー。

「すみません、魔力石の換金もお願いしていいですか」

「はい、大丈夫ですよ。こちらの袋の石、全てでよろしいですか？」

「全部でお願いします」

「それでは鑑定しますので、少々お待ちください」

カウンターに魔力石が並べられ、職員さんが一個ずつ見ていく。

「ふつ、結構な数がありますね。全てで、銀貨5枚になりますが、よろしいですか？」

「おおーす」お金になつた。さすがに結構溜め込んでたからなあ。

「それでお願いします」

「されでは、これからお代になつます」

お金の重みを手に感じ、少し嬉しくなる。今日はこれで猫をここで食べてもらわないこと。

「ありがとうございます」

「いやいや、あつがとうございました」

綺麗にお辞儀する職員さんに背を向けて、レカのまづへ行く。

レカはものめりしそうに掲示板を見てくる。

「何かいい依頼でもあつた？」

「あ、師匠。もう終わったの？」

後ろから声を掛けると、ぱっと振り向くレカ。

「ああ。なんかほめられたよ」

「おおー、ねすが師匠ー。」

なんか、むず痒いな。ほほ猫さんの手柄だしなー。

「ところで何見てたんだ？」

「ああー。うちのボードなんだけど、結構薬関係の仕事があるなー

と思つて

「うーん、軽い怪我だと、薬師に頼つたほうが教会に行くより安く済むからね。病気はまた別だけど」

教会は、お祈りによる癒しを得意としてる人が大抵ひとつ教会に一人はいる。

もちろん、寄付という形でお金を払わないと、治療してもらえないのだけど、大抵の怪我は治せるから、重症の人やお金が有り余つてる人なんかは教会に行く。

病気は、祈りによる癒しでも一瞬で完治することはなく、薬と同程度の効果しかない、というのが一般的だ。ただ、薬は人が判断して薬を出すが、祈りのほうはどんな病気でもすることは一緒なので万能である。

「これだけ依頼あると、薬師つて儲かりそうだなあ

「儲かるかは分からないけど、そこまでの依頼をこなせるようになると、長い間勉強しないといけないしね」

「そりなんだ、やっぱ難しい?」

首をかしげこちらを見てくるレカ。

「うーん、レカに教えるのは最低限の知識と、傷薬と風邪薬の作り方の予定なんだけど、それでも普通なら1ヶ月くらいかかるんじやないかな。他にも、症状を自分で診て、その人に合った薬を自分で

判断して処方するつてなると、僕は10年かかったよ。レカは器用で覚えもいいけど、やっぱ年単位でかかるね

「そつかあ、やっぱそんなにかかるんだ」

「それに、こここの依頼の半は、町で商売してる薬師からで、薬草を探つてくれつていうつ依頼だね」

「むー、現実は厳しいね」

「そうだねえ。レカが本当の意味での薬師になりたいって言つなら、僕の婆様を紹介してもいいよ?」

婆様なら喜んで教えてくれるだろ?。

「うーん。今はやめとく。そこまで深く考えられないし、師匠に教えてもらひの樂しいしね!」

「了解、もしその気になつたら相談するんだよ」

「はーい」

つと、そういうばレカに分け前を渡すの忘れてた。

「どひひひ、レカさんや、これが今回の報酬だよ」

「え? 私に? 報酬?」

レカは不思議そうに聞き返していく。

「うそ

「わ、私何もしてないよーっ！」

びっくりして僕の手を押し返すレカ。

「いやいや、ちゃんとパソコン退屈でつこてきたじゃないか

「いや、本当に後ひついてただけだしー！」

僕が差し出す報酬の入った手を必死に首を振って拒否しようとする。

「今度から、ちゃんと働いてもううから、これは受け取つて

「け、けど・・・」

「受け取らないと、今日とか明日の『飯代あるの？』

渋るレカに奥の手を出す。

「う・・・うー。貰います・・・」

さすがにここまで言いつと、レカも受け取つてくれた。

「はー。今日は一日お疲れさま

「ちよ、ちよっと師匠、銀貨一枚も？ー」

「うん、魔力石のほうは僕が貰つちゃったけどいいかな？」

「それはもちろんいいけど・・・って違うわ。ですがに銀貨一枚は貰いすぎだよー。」

「依頼料を折半だから、気にしないの」

「け、ケドー。そうだーこれから歸仏に歸つてお金のこくらか返すよー。」

「もうこののは、ひやんとお金が溜まつてから元に戻しなやー。」

「うー。」

「はーはー、うーうー言つてないで、今日さもひて宿にかえりまよ、お嬢さん」

「うー。」

『唸るレカを連れて宿に戻ったのだつた。

## 第十六話「無理難題の日」

レカを引き摺り宿に戻り、「」飯を食べて部屋に戻り、今日取つてき  
た薬草で、傷薬の作り方を教える。

稼ぐのが目的なので、なるべく高品質で、ハロース周辺で手には入  
る薬草で手間を掛けずに作れる物を教えている。

薬草の匂いが部屋に充満する中、一息ついたレカが話しかけてくる。

「よかつたね、師匠」

「んー？」

猫さんに背を預け、うつらうつらしてたので、間延びした声が出て  
しまった。

「あはは。猫さんの事だよー。今日は部屋で寝れてよかつたね」

「あー、たしかに」

「つていうか、まだ猫さんに連れてこられて、1日たつてないんだ  
よね・・・なんか今日で人生変わったなあ」

レカはしみじみと思いだすよつとして言つ。

「僕も、町に来て2日でこんなところあるとは思わなかつた」

「師匠はやつしれば、なんで旅してるの？急いではいないみたいだけど」

セトビツル。

本当のこと言つと、頭おかしい人と思われないだろ？

けど、嘘つくるもなあ。

「実は猫さんは、珍しい種でね、他の大陸から連れてこられたんだ。んで、いろいろあって、僕の手元に来たんで、もといた場所に返すために、名前で、各地を回りつと思つて旅してるんだよ。僕も男だからね、冒険といつものに、一回出てみたかったんだ」

大分事実を覆い隠したけど、嘘はついてないな、うん。

「へー。猫さんってよその大陸の魔物なんだ」

「いやーん

「ほほー。それで師匠は、猫さんと旅してるんだー」

話してゐる途中で、レカが寄つてきて猫さんに背を預け、今にも寝そ

うになつてゐる。

たしかに、猫さんの体は魔性だからなー…ここつこ寄つてしまつて、癒されて眠くなつてしまつのも仕方ない。

「はい、今日また寝よう」

「むー

「あー、はーはー

レカが両腕を伸ばしてきましたので、抱っこしてベッドに移して、僕もベットに入る。

妹でもいたらこんな感じか。

「へへへ。お父さんがいたら、師匠みたいな感じなのかなー

「せめてお兄さんでお願いします・・・

「あはは。おやすみ、お兄ちゃん

「はー、おやすみなれ。猫さんもおやすみ

「ねやねみー

「はーん

それから一週間ほど、依頼受けたり、薬草摘みにいったりして過ごした。

レカは相当器用で、すでに簡単な傷薬なら作れるようになった。

売りに出しても問題なさそうなので、収穫祭も近くなり、ハロースの市も賑わってきたので、出してみようといふことで、今日は宿で薬を作ってる。

猫さんも今日は宿で、レカが根を詰めすぎないよう監視してもらつている。

僕はといふと、ハロースの中央に居を構える大商人の家に向かっている。

商家の子供が病を患つて、ハロースどころか王都の薬師にまで頼つてらしいのだが、回復の兆しが無く、教会の神父も診たらしいのだが、結局ダメだったらしい。

なんで、そんなことひじやしゃじやつ出みとじてるかと言ひと…！

薬草を取りに行つた帰りに、グリスさんに頼まれたのだ…。

その商家がグリスさんの実家で、子供といふのはグリスさんの兄の

お子さんらしい。

レカの件で動いてもらつてるし、真剣に頼まれたので、とりあえず診るだけ診てみますと言つのが精一杯だつた。

かつこよく、治して見せますとか言えたらよかつたけど、神父の祈りがダメなら、僕の祝福もダメじやないつていうことに思い当たつて・・・

薬師としても、王都の人たちより僕のほうが腕がいいわけもなく・・・

ああああ！いかんいかん、いろいろ悪い方向に思考が。

猫さん連れてくればよかつたかなあ、ああけど家に入れてもらえな  
いか。

そういう考えている間に、とうとうグリスさんの実家の前までやつてきた。

そしてその家の大きさに唖然とする。

すごく・・・大きいです。

これは、人一人の身分証をどうにかしてみようつて言える人の実家

の大きさだーー！

くだらない事を考えていると、門番さんがいぶかしむよつこいつちに来たので、事情を説明して入れてもらひ。

家のほうに行くと、グ里斯さんに似た歳のいった男の人に出迎えられた。

「君がキャス君だね。グ里斯から話は聞いているよ。なんでも旅の薬師だそうだね。私は、グ里斯の父、ロハンだ」

「よ、よろしくお願ひします」

圧倒的存在感！

観察してゐるような視線がびしづしくるぜ……！

「ははは、お願いするのはこちらのほうだ。来て早速ですまないが、孫の様子を見ていただいくよろしいだらうか」

「わ、分かりました」

「うひて、無理難題へと向かうのだった……」

## 第十七話「薬師のお仕事の田」

グリスさんの実家の2階、一番奥の部屋に入ると、そこには大きなベッドに、ちよこさ、と女の子が寝ていた。

「この子が孫のアリアだ。症状のほうは、最初は胸の痛みを訴えたので、王都の薬師、教会の神父にも診せたのだがな。王都の薬師は、こんな症状は見たことがないと言いおるし、町の神父は、金、金言う割には、祈りがまったく効果がない！うちがもう少し教会に縁があればよかつたのが・・・、最近では、痛みだけでなく、段々体が弱ってきて、立つことも難しい」

「うーむ、僕もこんな症状みたことないなあ。

「他の薬師さんに、何か薬を出されましたか？」

「ああ、痛み止めの薬だけだが。えーっと、これだな

渡された薬を嗅ぐが、痛み止めとは関係ない薬草が入ってるなあ。

「失礼ですが、これは王都の薬師が？」

「ああ、そうだ。町の薬師は自分では判断できないと逃げてしまつてな」

なんといつ・・・。

まあ、良く分からぬ症状の大商人の子供を診て、薬出して万が一死んだなんてことになつたら、町では暮らしくそつだしな。

とつあえずこの薬はやめてもらひうか。

「そうですか。この王都の薬師の薬は、痛み止めとして効果がありましたか？」

「いや、まったくないな・・・」

うーん、王都の薬師もピンきりなのかね。

「とつあえず、この薬はやめましょ。痛み止めとは関係ない薬草が入つてます」

「な、なんだとー? そんなこと、嗅いだだけで分かるのかー?」

「分かりますよ、薬師ですからね。こんなので痛みが止まれば、そちらへんの雑草を煮て食つても痛みは止まります」

「ば、馬鹿な! 王都でも腕利きの薬師と聞いて、頼んだのだぞー?」

「ひりに食つて掛かつてくる口ハンさん。」

まあ、さすがに息子の紹介とはいえ、どこのだれとも知れない小僧の言つことよりは京都の薬師を信じたいんだろうな。しかしこれはひじゅぎわる。

「腕利きかどうかわかりませんが、これは薬とは呼びません。薬草を適当に混ぜただけのものです。僕の手持ちをお渡しますので、こちらを飲んで頂ければ、そのよく分からぬものが、薬じゃないということが分かりますよ」

「だ、だが・・・

「僕は、田舎の薬師ですが、雑なものを人様に飲ますようなことはしません。ちよびお昼が近いですし、お嬢様に一回起きてもらいつて、少し食事を食べてもらつてから、薬を飲んでもらいましょう。それから少しだすれば、分かります」

ちょっと、大口を叩いてしまつたが、それくらい言わないいけないことだ。

「う、うむ。分かったが、最近アリアは食事もあまり受け付けなくてな。薬は飲ませていたのだが・・・

「え・・・ほとんどの何も食べずに、このへんなものを『えていたんですか・・・?』

「あ、ああ

これは、胸の痛みと体が急激に弱つてきたのは、関係ないのかもしないな。

「失礼ですが、こんなものばかり口にしていれば、さすがに体も弱りますよ・・・？」

「なにー？本当かー？」

「そりや、よくわからない配合してありますからね。薬だつて自分の症状に合つたものを、適切に飲まないと、最悪死ぬことだつてあるのに。食事が減れば、それだけ栄養が体に回らないのに、その弱つた体にこんなもの与えれば、毒を盛つているようなものですよ」

「わ、私は、私は・・・！」

む、この変なものを作った王都の薬師が許せなくて、つい熱くなつてしまつた。

ロハンさんが、すいと落ち込んでるー。

「すみません、まるでそれを飲ませてる人が悪いみたいな言い方をして。そんな下手なものを薬と言つて渡した王都の薬師が許せなくて、熱くなつてしましました。誰が悪いかつて言えば、そんなものを作つて渡した自称薬師なんですから」

「わうだな・・・」

少し立ち直つてくれたロハンさん。

「はー、そうです。すみませんでした」

「いや、いい。私たちも悪くないわけじゃないからな。そんなことより、食事だつたか？」

「あ、はい。よければ厨房借りたいのですが」

「それはいいが。なんでだ？」

「あまり食事を食べていらないなら、病人に優しい食を、と思いまして」

「分かった。案内させよう。よろしく頼む」

婆様と二人だつたから、実は料理は少し自信がある。

というわけで、婆様直伝のスープを作る。

いろいろ薬を入れてあるのだが、全部が調和しておいしい味になる  
という、婆様マジック！

ちなみに薬は、体が弱つたときに飲むものを数種類。

これ飲むと、暖かくなつてぐつすり眠れるんだよなあ、風邪引くと  
婆様が作ってくれたつけ。

懐かしんでいると、いい匂いが立ちこめてきたので、皿に盛つてお嬢様の部屋に戻る。

お、お嬢様が起きて、口ハンさんと話してゐな。

「失礼します、お食事を持つてきました」

そう言つて、備え付けのテーブルに置く。

「おお、ありがとうございます。アリア、こちら旅の薬師でキヤス君だ、グリスの紹介でな、腕は確かだから安心しなさい」

「まあ！叔父さまの一アリアと申します、よろしくお願ひします」

グリスさんの名前を聞いてうれしそうにするお嬢様。さすがグリスさん、人気があるな。

「キヤスです。じゅりんじょくお願いします

挨拶も済ませたので、早速スープを飲んでもらおう。

「早速ですが、体にいいもので作ったスープを作ったので、食べてから薬を飲んでもらいます」

「あの、私、食欲があまり……」

「一口でも食べてみてください。自分で量りのりも何ですが、おいしいですよ」

「分かりました、それでは頂きますね」

軽くお祈りをしてから、お嬢様はスープをすくって、上品に口元に含む。

「あ、おいしい。とてもおいしいです、このスープ…」

「それは良かったです。あまり急いで食べないでトキッね。お代わりもありますから」

「まあ、うれしいわ

「ふむ、それでは私たちも食事をじょうが

一旦この場を、部屋の前で待機している侍女さんに任せ、食堂に移動して昼食をいただく。

「今日は、調子がいいみたいだ。それでも、起きたときは胸を押されていたから、痛いみたいだが……」

「原因はこれからとして、とりあえず痛み止めを飲んでもらって、体力を付けましょう」

「もうだな、分かった。それにしても君は優秀なんだな」

結構信頼してもらえたようでなによりだ。

「いえ、そんなことは……。師匠に比べればまだです」

「ふむ。最近は、聖女の影響か、教会で癒しを行使できるものが増えたらしくな。薬師の質は、王都でも落ちてるようだ……いや王都だからか。そこは裕福な者が多いからな。寄付も多くできるのだろう」

「聖女、ですか？」

聞き慣れない単語が出たので聞いてみる。

「ああ、なんでも癒しの神の代行者だそうだ。各地を回って施しをしていると聞く」

「それはまた、すごい方なんですねえ」

「そうだな。しかし、噂では、教皇は聖女を近くに置いておきたい癒しの神はいろいろしてるんだな、祝福ももらつただけであつた事無いけど。

「そうだな。しかし、噂では、教皇は聖女を近くに置いておきたい

が、聖女が勝手に飛び回っているといつ話もあるな

「噂が本当なら、とんだお転婆娘ですね」

「はっはっは、確かに。収穫祭が近いせいか、人と共にいろいろ噂が入ってくるのでな。他にも、王子が実は双子だったとか・・・王都ではお転婆な姫さまが暴れてるとか・・・学術国ではまた新しい魔法具が運び込まれたとか・・・帝国と同盟がまた戦争を始めたとか・・・隣の大陸で神獣の子が生まれたとか、その子が攫われたとか・・・」

さすが、元大商人。いろいろ知ってるなあ。噂話もこれだけあると、本当なのもありそうだな。

覚えがある噂も混じってるし・・・

目立たないよじこじょつーー！

話をしていたら、昼食もとり終わつたので、お嬢様の部屋に戻る。

スープも食べ終わつていたので、さっそく薬を飲んでもらつ。

「この薬を飲んでください。飲むと眠くなりますが、寝て起きた

ら、痛みも大分引いてると思こます

そういうて、お嬢様に薬を渡す。

「こつものとは違つのですね」

そういうてお嬢様が薬を飲む。

「だんだん眠くなつてくるので、そのまま寝てください」

「分かりました」

「さて、お嬢様も寝たよつなので、今日はかえりますね」

少しだら、すぐ寝息が聞こえてきたので、ロハンさんに向けて言う。

「もし何かあつたら、大樹の枝亭に泊まつてますので、連絡を下さい。すぐに向かいます」

「うむ。なんなら泊まつていってもいいぞ、息子夫婦もそのうち帰つてくれる」

「あー、宿に人を待たせてるので。また明日、午前になりますね」

「そうか、分かった。明日の午前だな。待つていろるが」

「はい、それではまた」

そして、グリスさんの家を後にした。

## 第十八話「お金を貸した日」

な、なんとか乗り切った……！

しかし、あんな薬を売りつけるなんて酷い話だ。

おかげでこらするな。

宿戻つたら猫わんに癒されよう。

あとは、痛み止めをある程度つくるか。

つていうか、帰り際に貰つたお礼の袋がなんかすゞジヤラジヤラ

言つてる。

なこじれこわー。

もしものときのためこ、といつておいつ……

「ただいまー猫さんーレカー！」

「「やーーーこつーーー」

扉を開けた瞬間猫さんが飛び掛ってくる！

もうひん、避けるなんていとせせゅい、そのまま抱きこい、ベッドライブ！

「おかえりー、師匠」

「ただいまー」

猫さんと抱き合ひつづレカを見ると呆れ顔だ。

「本当に、猫さんと師匠は相思相愛だよね。師匠が出て行つてちよつとするど、猫さんがうろついたして、薬作りになかなか集中できなかつたんだよー！」

「やつや、すまん」

「いやー・・・」

すまなそうに鳴く猫さんもまた愛らしい。

「可愛かつたからいいけど。師匠が帰るちよつとまえに、猫さんがベットの上で獲物を狙う体勢に入つたときね、ちよつと怖かった・・」

「またまた、すまんね。猫さんも、レカにあんまり迷惑かけちゃだめよ

「「やん！」

猫さんが、レカに寄つていつて体を擦りつける。

そんな猫さんを、レカは穏やかな顔で撫でている。

「仕方ないなー。とにかく師匠、グリスさんの家はどうだったの？」

「うーん、なんとかなりそうでならなそれで。まあ少し改善できたんだけど、そもそも原因が分からなからなあ、どうにもならなきや、神様にでも祈つて見ることにするよ。レカのほうは、薬草は足りてる？市に出すなら、前の田に教えてね。僕も市は初めてだから、見ておきたいし」

「はーい。けど実際どのくらい作ればいいのかな？」

指折り考えるレカに和みつつ疑問に答える。

「うーん、市を見た感じだと、そこそこ売れてたからね。薬草取りについて作つて、次の日売つて、って考えると、最低でも半日で20は作れるようにならないときついね」

「20かあ、まだまだだあ

「商売は何でもそうだけど、信用が第一だからね。いい物を平均的に作らないといけないよ。あとは、定期的に売れるようにしないといけないね。最初はそこまで売れなくても、使った人がいい物だと

判断してくれれば、ちゃんと売れるよつになると思つし、定期的に出しだれば他所にお客さんが流れりやつることも抑えられるしね」

「分かつたよ、師匠。けど、師匠は市で物卖つたことないのに、よくやうごうと知つてゐよね?」

「村に来る行商人のおつちゃんが、商売について話してたから、ほとんどど受け売り。地方の村を周つて歩いてる人だから、苦勞が多いみたいで、いろいろ教えてくれたんだよ」

「なるほど。それじゃ、いい物を作るために、夕飯まで師匠と猫さんはお散歩でも行つてきてよ。猫さんも部屋の中ばかりじや息が詰まるだね!」

「つーん、レカが根詰めないか心配なんだけど」

「師匠と猫さんが近くでラブラブしてたら、私の精神が持たないんだけどな!」

笑顔で言つてか、その笑顔に得も知れぬ悪氣を感じる。

「あー、はー、分かりました」

「素直でよいしー。猫さんもテーート楽しんでおいでのー」

「はー、ちーん!」

と言つわけで、弟子に部屋を追い出されて猫さんとドアート。

おいしい匂いに誘われて、屋台が立ち並ぶ通りに出る。

串焼きを買って、猫さんに与えつつ自分も食べて歩いていると、人にぶつかってしまった。

「おっと、すみません」

「あ、いえ、私の方こそ、不注意ですみません」

うおー！ 獣人さんか。

やさしそうな人で助かつた。

獣人には気性の荒い人も多いらしいからなあ。

顔は美形、短い髪とあいまって、中性的で女性に好かれそうな女人だ。

尻尾と耳が猫っぽい、実にいいね！

「「いやーん！？」

「はー、じめんなさい。耳が・・・猫耳が僕を狂わせたんだ・・・けど猫さんのお耳一筋だよ？浮氣してないよ？」

「「いやー？」

「本当、本当ー今日は僕のベットで一緒に寝よつー。」

「こやーん

嫉妬する猫さんも可憐いよー！猫さん！僕はー！僕はもうー！

「あ、あのつー。」

あ、やっぱー、獣人のお姉さんを無視して猫さんと一ちゃついてしまつた。

「は、はーーすみませんー！」

「あ、いえ、そんな。こちらこそすみません。そ、それでですね、ちょっとお尋ねしたいことがあるんですが・・・」

申し訳なさそう、お姉さんが問い合わせてくる。

「はー、私に答えられることなら何なりと

「えーっと、この辺で、お金の入った袋を見ませんでしたか？」

藁にも縋りそうな勢いで聞いてくる。

「見て無いです。無くしたのですか？」

「そうなんですよー！『気づいたら無くなつてー！』

すられたのか、落としたとしても、もつ拾われてとっくに無いだらう。

つていうか、獣人のお姉さんがやたらフレンドリー、そして親近感が沸いてくる。

「それは、たぶんもう見つかないと・・・」

「やつぱりですか・・・」

ショボンと、耳が垂れる獣人のお姉さん。

「あー、お金以外に何か入つてたんですか？」

「いえ・・・お金もほとんど入つて無かつたのですが

更に、しつぽがぺたんとなる獣人のお姉さん。

「あ、あの、無理を承知でお願いしたいのですがー！お金をいくらかお貸し頂けないでしょうか！？」

いきなり大声でお金の貸してくれと言つてくる獣人のお姉さん。

わざわざから注目を浴びていたけど、更に視線が集まつてきたり。

「と、とりあえず向こうで話しましょー!...」

獣人のお姉さんの手を取つて人のいないうちへ。

人のいないうちで話を聞くことに。

「すみません、注目を集めてしまつて」

全体的にしゅんとなる獣人のお姉さん。

「いえ、気にしてませんので。それで、いきなりどうしたんですか?」

「あ、あのですね。実は路銀が底をついてきまして。本当ならギルドのほうで依頼を受けるんですが、ちょっと問題があつて動けない状況でして・・・。その問題も明日には片付きますので、そしたら依頼を受けてお金かえしますので、ようしければ、お嬢様の食事代だけでもいいのでお借りできないかと」

「あー。事情は聞きましたが、食事代だけでいいですか?寝ると

「じゅうとか」

「宿は、町にきたときに収穫祭までいるつもりで、前払いで済ませたのですが、まさかここまで問題が長引くと思わなくて・・・」

問題が長引いたせいで、ギルドの依頼も受けれなくて、とビメにお財布を無くして、『飯にも困ってしまったのか。

「それじゃあ、食事代だけでいいんですね」

「は、はい。貸していただけるのですか！？」

「いいですよ。ちょうど臨時収入もあったので」

そう言って、銀貨を一枚渡す。

これなら、相当大飯食らうじゃない限り2人で3日は食べれるよな。

「二、こんなにお借りしていいのですか？」

「構いませんよ、困ってるときはお互にやめです」

村では、一人が困ったときにみんなで助けないと、自分が困ったとき助けがこないからなあ。

まあ限度はあるが、悪い人でもなさそつだし。

「ありがとうございますー絶対にお返しいたしますー!ビレーナお

住まいをお聞きしてもよろしいですか?」

「あー、宿街の大樹の枝亭に、収穫祭終わるまでは居ますので。無理はしないでいいですよ?」

「いえ、お借りした物を返さないのは、どの神の教えにも反しますので」

「分かりました、それでは待ってますので」

「はい! それでは、失礼致します。ありがとうございました!」

礼を言つて、獣人のお姉さんは走つて帰つていいく。

いい尻尾と耳だったが、そそつかしい雰囲気をかもし出す獣人のお姉さんだったなあ。

さて、僕たちはもう少し屋台を堪能しようかね。

「にゃん

猫さんを引き連れて、来た道を引き返すのだった。

## 第十九話「旅の仲間ができた口」

その後、露店を冷やかしたりして宿に戻り、やつぱり根を詰めて薬を作っていたレカを引つ張つて晩御飯を食べさせる。

「そんな、根詰めなくとも、特にこつ出すとか決めてないし」

「けど、なるべく早くこりでれるようにになって、師匠に恩返しがたいし」

なんていい弟子を持つんだ、僕はうれしいよー

「まあ、無理だけはしないよー。体壊しでもしたら元も子もないしね」

「はーい。けど、収穫祭もあるからなー。その前に、ちやんと市に並べられるだけの量と質の薬を作れるよーになりたいー」

「そうだねえ。さつきちょっと見たけど、どれも平均的に調合できてるし、作るのも少し早くなつたし。もう少し早くくれるよーになれば、定期的に市に出せるよーになるんじゃないかな。傷薬は、一年通して売れるしね」

「つーん、頑張ろーー田指せ市場独占ーー」

「独占するなーーまあけどそんなことより、定期的にレカ一人で薬草を取りに行けるように、身分証をどうにかしないといけないしなあ

せつこえば、ロハンちゃんに頼めばいけるかもしね。

・・・！

ああそれでか、グリスさんの頼みは。

無理難題だけど、解決できればレカのこと頼めるしなあ。

ハツ！ついでにレカの薬をロハンちゃんの店で売つてもうれるよつに  
すれば！

冴えてる、冴えてるぜ僕！

「・・・匠？師匠！」

レカが肩をゆすつてくる。

「…? どうしたのレカ」

「どうしたのって…。わざわざからずつと師匠のこと呼んでたん  
だよー！」

「む、すまんすまん。レカの今後でいい案が思い浮かんでなー！」

「え、あ、そーなんだ」

なんかレカの反応が微妙だ。

「なんだー？ 疑ってるのか、本当に妙案なんだよ！ 僕がいなくなつてもレカがちゃんとやつていけるつていう！」

「し、師匠ーその事なんだけどー！」

意を決したようにこちらを真剣に見てくるレカ。

「は、はいー？」

釣られて僕も背筋を伸ばしてレカの話を聞く。

「え、えっとね、私、師匠の旅に同行しちゃダメかな？」

「それは別に構わないというか、嬉しいけど、猫さん帰るために、隣の大陸行くことだけは決定してるんだよ？ 危ないよ？」

「うん。分かつてる。けど師匠のお婆様じゃなくて、師匠にもっといろいろ教わりたいー！」

すげーに真剣な目でレカが僕を見る。

ここまで言われたら、断る理由もないし、実際旅の仲間ができる嬉しさとこれが本音だ。

「よしー！ レカ、一緒に行こー！」

「え、いいのー？ やつたー！」

嬉しそうにほしゃぐレカを見ていると、いつまでも嬉しくなる。

「よひしぐね、レカ

「ハヤンー。」

「ハヤリハリ、よひしぐね願いします、師匠一猫さんー。」

そして、夕飯も食べ終わり部屋に戻る。

レカが傷薬を作っている横で、僕も痛み止めを作る。

「グリスさんの依頼と収穫祭が終わるまでは、ハロースにいるから、  
その間にレカの身分証はどうにかしよう。最悪無くてもいいけど、  
あつたほうがいいからね」

「はい、お願こしますー。」

レカが元気に返事を返してくれる。

「あとは、レカの旅支度もしないとね

「せつちは、自分でお金稼いで準備したいな、何でも師匠頼りは嫌  
だし」

レカは申し訳なさそうに希望を言つてくれる。

そんな」と氣にしなくていいのに。

「頼られてもいいんだけどね。」

「あはは。けど自分でどうにかしてみたいから、ダメだったらお願  
いする」

「そうだね、まだ時間あるし。せつかだから、レカの作った薬を  
市に出したいしね」

「うん。頑張る。」

両の手でこぶしを作りやる気満々のレカ。

「僕もグリスさんの依頼頑張らないとなあ。けど原因が分からぬ  
しな・・・。そもそも神父が祈りを奉げてダメなんて」

「教会の似非神父？」

「似非神父？ハロースの教会の神父に頼んだけど治らなかつたらし  
い」

「へー。けどあの神父いい噂聞かないよ、手抜いたとかじゃない？」

「いやいや、町の大商人の娘だし、手は抜かないでしょ」

「そうだね、あの似非神父お金につるさんいらっしゃい」

「お金のつるさん神父って・・・」

さすがに呆れてしまう。

「噂だと、裏で町のチンピラとつるんだとが言われてるよ。あんまり係わり合いになりたくないタイプだね」

「それは嫌な神父だなあ」

ふーむ、明日自分でも一度祈ってみるか。

僕もあんまり信仰心ないけど。

痛み止めも順調に数が出来たので、薬箱に入れてしまつ。

レカも一区切りついて、猫さんを撫で回している。

「今日ははまひそら寝よつか」

「はーい」

「こやーん」

猫さんが、スタッフと僕のベッドに上がつてくる。

「そういえば、一緒に寝るって約束したな。」

「あれ。猫ちゃん、師匠と一緒に寝るの？」

「毎晩は約束したんだよ」

「うーん

「あー、私も一緒に寝るのー。」

そつまつへ、レカがいつかのベッドに飛び乗つてくる。

「うーん」と一矢うちある。「..」

「いやー、いやー」

「わ、わつ。師匠押すなこでー。」

結局、なんとか各自定位を探し出す。

「レカ、あぶないでしょー。」

「「」あんたでいい……けど、私だけ仲間はずれは嫌ー。」

「仲間はずれって……」

「うー」

唸つてるレカを見ると、これ以上怒るのも気が引けてくる。

娘がいるといふな感じなのかな……

クエスさんの気持ちが分かつた気がする。

「仕方ない。狭いけどみんなで寝るか。落ちるなよ、落とすなよ」

「やったー！」

「うやんー。」

こうして、2人と1匹で眠りこついた。

## 第一十話「力が強化された日」

奇跡的に一人の脱落者も出さずに朝を向かえ、朝食をとつてロハンさんの家に向かう。

すぐに、ロハンさんとアリアの両親に迎えられ客室へ。

アリアの両親はとても丁寧にお礼を言つて、仕事に出かけて行つた。

「すまんな。本当なら息子夫婦もちゃんと紹介したかったのだが。収穫祭前は仕事も休めないから勘弁してやってくれ」

「いえいえ。仕方ないですよ。それより、お嬢様の様子はどうですか？」

「アリアはあれから今朝まで寝てた。久しぶりにぐっすり眠れたらしい。痛みも無くて、しつかり朝食も食べていた」

「よかつた。実は、昨日あれだけ大口叩いた手前、痛みが引いて無かつたらどうしようかと・・・」

本当に良かつた。

あとは原因がわかれればいいんだけどなあ。

「ありがとう。君はあの子の恩人だ」

「いえ、まだ治つたわけじゃないので」

治せるかも分からぬのに、恩人なんて言われると焦る。

「いやいや！あの子があのままだつたらと思つて、本当に感謝してもしきれない」

あの状態よりかはましか。

けど、本当に治す田処が立たないな。

そもそも、祈りはほぼ万能だから、それが効かないっていうのがな。

まあ、祈つた神父があれみたいだし、一応僕も祈つてみるか。

「とつあえず、様子を見たいのでお嬢様の部屋に行きましょう

そう言って、お嬢様の部屋へ移動する。

「おはようござまく、お嬢様」

ベットの上に起き上がり、本を読んでくるお嬢様に声を掛ける。

「まあ！先生来てくださいたのですね。おはようござまく」

先生・・・！

師匠と並んでいい響きだ・・・

「お加減はいかがですか？」

「ヨリヨリ最近で一番調子がいいです。これも先生のお陰です。ありがとうございます」

上品に微笑んで感謝を言葉にするお嬢様。

あの無骨なグ里斯さんと姪には見えないな！

「朝ご飯もちゃんと食べられたようですね」

「はい！けど、先生のスープのほうがおいしかったです」

「あはは、気に入ってくれて良かった。また、お皿に少し更多めに作

つておくれ

「嬉しいですー・ありがとうございます」

ロハンさんは椅子に座つて二三二三二三してゐる。

孫娘が元気に話していくのがとても嬉しい。うだ。

「さて、痛み止めのまはしつかり効いてるみたいだね」

「はい。前に飲んでいたのとは全然違うのですね」

「あー、はい。あれとは物が違いますので」

「やつなのですか。先生はすごい先生なんですね!」

田をきりきりせせてお嬢様がこちらを見てくるから困る。

「僕なんて師匠に比べればまだまだなので」

婆様は本当に凄腕だからなあ。

薬作るのも早いし、処方も的確だし。

「恥ずかしながら、お嬢様の病気自体を治す田処が立つていませんので、少し質問してもいいですか？」

「もちろんです、なんでも聞いてくださいー！」

お嬢様がベットから身を乗り出して答えてくる。

「そ、そんな意気込みないで大丈夫ですから」

「あ、失礼しました」

ショボんとして、ベットに背を預けなおすお嬢様を見て少し罪悪感が！

氣を取り直して質問タイム。

「胸が痛くなる前に、何か変わったこととか、ありませんでしたか？」

「えっと、痛くなる直前に、何かが体に入ってくるような感じがして。とても悲しい感じになつて・・・」

ついそこで胸を押さえつづむくお嬢様。

「大丈夫ですか！？」

「思い出したら、すこし痛んでしました。大丈夫です」

うーむ、やっぱり自分でも祈つてみるか。

「すこし、考えを纏めるので、待つてもうつていいですか？」

「はい、分かりました」

部屋にある椅子に腰掛けて、いかにも考えてますよつて感じに腕を組んで目を瞑る。

しかし、祈るのは久しぶりだな！

あーあー、テスティス。交信テスト。

神様神様、あなたのかわいい僕が、ここで苦しみであります。ぜひ、助けていただけませんか？

・・・

「人の子よ、待つていましたよ」

あれ、天使様じゃないですか。

僕、癒しの神様に用がですね！

「分かっております。ただ、あなたはあまり信仰心がありませんので、我が主が直接お声を掛けることができません」

おーまじーハビ。

「我が主のお声を聞きたいのなら、もつ少し信仰心を持つてください

い

あはい。

とにかくで、待っていたというのは？

「あなたの前で苦しんでいる人の子には、事情がありまして、それを解決するために癒しの力を持つものを待っていたのです」

そつなんですかってそれってべつに僕じゃなくてもいいんじゃないですか。

神父が前に祈つたらしいのですが。

「ある程度力のあるものでなくてはいけません。あの神の子は信仰心を失つてすでに力を行使することもできないようです。あなたの場合は、信仰心が無くとも、直接祝福を受けていて、世界でも類を見ない癒しの力があるので、苦しんでいる人の子を助けることができるでしょう」

そうなんですか。

けどそれじゃ、僕が来なかつたらやばかつたんじゃ！

「いえ。元々は我が主の声を聞けるものが向かつていたのですが、あなたのほうが偶然早く辿りついたのです」

なるほど。

そしたら、僕はどうすればいいですか？

「本来なら、我が主から力を一時的に授けるといふですが、あなたの力なら問題なく癒せるので、強くその人の子を癒したいと祈れば大丈夫です」

それでは。

・・・・・

どうですかね？

「問題なく力が行使され、人の子の苦痛は取り除かれたでしょう

おお、よかつた！

「あなたのお陰です。礼を言います」

いえいえ。ところで、なんあんな事になつてたんですか？

「あの人の中子の中に、天使の力の一部が残っていたのです」

なんだつてー！

「我が主の獣が攫われたとき、天使の一人が、人の子に入つてそれを奪い返そうとしたのです。結局、その天使はそれに失敗し、その人の子に力の一部だけが残つてしまつたのです」

なるほど。

それでは、もう大丈夫なんですね？

「はい。もう、力は取り除かれ、あなたに吸收されたので、大丈夫です」

そうかそうか、よかつたよか・・・つた・・・！？

え、吸收？！

「はい、あなたの中に、天使の力が吸收されました」

なにそれこわい。

「守護の祝福が強化されました」

それは嬉しいです。

「それでは、我が主の獣をよろしく頼みました」

あ、はい、任せてください。

## 第一十一話「聖女様と出会つた日」

「先生?」

お嬢様が心配そうにベットの上からこちらを見つくる。

「あー、すみません、ちょっと考え事に没頭していました」

「いえ。それで何かわかりましたか?」

「む、もう少し考え方を纏めさせてください」

あれ、どうしよう。

天使様と話して治しておきました。

なんて言つたら僕のために薬師が呼ばれてしまつ。

これは適当に誤魔化すしか・・・

「表が騒がしいな」

考え込んでいると、ロハンさんがそつと立ち上がり窓を開ける。

遠くに屋敷の門の前でもめている一人組みが見える。

少しの間成り行きを見守っていたロハンさんが、じらりと見てくる。

「気にせず行つて来てください。僕ももう少し考えを纏めていたいので」

ロハンさんが対応に言つてゐる間に少しでも考えを纏めなければ。

「む、そうか。すまんな、すぐ戻る」

そう言つと、ロハンさんは足早に部屋をでたので、早速どりにかできないか考える。

いろいろ考えてみたが、やつぱり自然に治つたこととするのが一番いいか。

気づいたら痛み止めが無くても大丈夫！これが人体の神秘だよ！つて押し通せばなんとかなるかな。

「すまんな、キヤス君、教会の人人が来てね」

ロハンさんが扉を開けて帰つてきた。

ロハンさんの後ろには、修道服姿の女性と見覚えのある獣人のお姉さんが立つていた。

「あーあなたは昨日のー。」

お姉さんも気づいたらしく、じつに見て目を見開いている。

「ほひ、キャス君は聖女様の従者と知り合いか？」

あの修道服の女性が昨日言つてたお嬢様で、聖女様なのか、さすがにお金を貸したことは黙つておこひ。

「ええ、といつても昨日遊びつかつてしまつただけなのですが、その節はすみませんでした」

「い、いえ。じちりじやー。そう言えば自己紹介もしてませんでした、私はアルタインと申します」

こっちの意図にきづいたのか、お姉さんは申し訳なさげに自己紹介をしてくる。

「あらあら。アルは私より先に挨拶してしまつなんて

すると後ろの聖女様が少し前に出てくる。

「私はリズテールと申します。アルとは面識があるようだ、私とも仲良くしてくださいね」

おつとりと笑う女性がこちらを見て言ひ。

「はい、僕はキャスと申します。じちりじやみじくお願いします、リズテール様、アルタイン様」

「あらあら、様だなんて。リズと呼んでください」

「私も様はちよつと。アルでいいので」

「それではリズさんとアルさんで。僕もキャスでいいので」

一人にせつ告げると満足そうに頷いて返事を返していく。

「して、聖女殿。娘は今この薬師のキャス君に見てもうつていて、ころなのだが、何の用がおありなのか？」

ロハンさんは神父のこともあり、あまり教会にいいイメージを持つていないうだ。言葉にとげがある。

「はい。実はつい先日、神よりお告げを賜りまして。ここのお嬢様が大いなる力が体の内に入ってしまい苦しんでいると。命の危機は無いと聞いていたのですが」

そつ言つて一度お嬢様を見て続ける。

「すぐに来たかったのですが、こここの神父様の噂を聞きまして、アルに頼んで秘密裏に証拠を集めていたのです。そちらは無事終わりましたので、よろしければ私に、お嬢様のために祈りを奉げさせていただけませんか？」

おつとり穏やかな口ぶりで話すなリズさんに、ロハンさんも少し見惚れていたようだ。

「あ、ああ。聖女様にそこまで言われたら、」ちぢこをお願いしたいほどだしな。キャス君、いいかな？」

「ええ、そうしてください」

そして僕は心の中で、神様に心の底から祈っていた。聖女様が治したことにしてください、と。

これが一番いいパターンな気がする。

神様が僕に味方してくれたんだきっと、さすが神様、少し信心といつやつを身につけたいと思います！

「それでは失礼します」

そう言つて、リズさんが成り行きを見守つていたお嬢様の手を取る。

瞬間、リズさんがほんのり発光する。

って、光ってる！？

聖女の癒しが特殊なのか、その光は段々お嬢様も包み、やがて引いていく。

お嬢様は光に包まれて、眠つてしまつたようだ。

穏やかな顔で眠るお嬢様にロハンさんもほつとしている。

「これで、大いなる力は取り除かれたと思います」

神が少し言葉というか意思を濁しているようでしたが、とリズさんが続けているが無視だ！

僕は何も知らない。

「つむ、とりあえず客間に移ろつか」

ロハンさんの喝令で客間に移動。

「まずはキャス君、本当にありがとうございます。君のおかげで娘は助かつた。そして聖女様、ありがとうございます。我が家を代表してお礼申し上げます」

そういう、深く頭を下げるロハンさん。聖女様の奇跡を目の当たりにして、大分教会不信も薄れたようだ。

「僕は病氣に関してはほとんど何もやつてませんので」

「私も神に導かただけですので」

「それでもお二人共に何かお礼をしたいのだがな」

少し困ったように笑いロハンさんが言つ。

「私は先の神父の不始末のお詫びということで、これから町の有力者として、エッカ教を信頼して頂ければそれで十分に」

「それとは別にいくらか寄付はさせてもらいますよ」

リズさんの言葉にロハンさんは頷き、うつむけたした。

そうして一人が自然とこちらを注目してくれる。

これはチャンスかな。

「その、もしよければ、僕の弟子がスラムの出身で身分証をもつて  
いないので、なにかと不便でするので持たせたいと思ってるのですが、  
ロハンさんにお力添えいただきたいと思うのですが、ダメでしょうか？」

「その話なら息子から多少聞いてたよ。勿論力添えしよう。そうだ  
な、あとで一筆書こう。それで大丈夫なはずだ」

これで一つ問題解決だな。グ里斯さんとロハンさんに感謝だ。

その後、昼食を頂き、少しの間ロハンさん、リズさん、アルさん、  
僕で話をする。

「しかし、まさか聖女様がハローースにお出でとは」

「お告げのこともありましたし、こちらのほうは聖都と遠いことも  
あって、なかなか情報が入ってきませんから。自分の足で赴くのが  
一番です。教皇領に引き籠もつていてはカビがはえてしましますわ

「はつはつめ、尊に違わぬお転婆のよつだ！」

ロハンさんもリズさんの話を聞いて、親しみを持てたのか、氣さくに笑う。

リズさんも氣を使われるより、お転婆と言われたほつが嬉しそうだ。  
「キャスさんはほつですか、その年で薬師として独り立ちしているなんて」

アルさんが尊敬の眼差しで見てくる。へすぐつたいな。

「いやいや、聖女様の騎士をやつてるアルさんのほつが凄いですよ

「そんなん、私なんて！」

「あはは、僕もまだまだですよ」

こちらも和やかに会話が進む。

しかし時間が経つに連れ、レカが根をつめていないか心配になってきたのでお暇すること。

ロハンさんと書いてもらった紹介状を懐に仕舞い、レカの話をした  
ら軽く昼食をつめてもらったのでお土産も万端な状態で帰途につく。

口ハンさんとリズさんも一緒に出て、家の前で別れる。

「（キャスさん、気を使つていただきありがとうございます、必ず返しにこまわるので）」

「（余裕が出来たらでいいですよ）」

アルさんと小顔で会話をす。

「あいあい、アルとキャスさんは仲良しかったですね。寂しいですね」

リズさんは笑顔で言つので、あまり寂しそうではない。

「は、ちがいますよーー。」れはですねー。

「それでは私たちも教会にいきますの、何かあれば頼つてくださいね」

アルさんのいいわけを無視してリズさんが続ける。

「はー、それでは

「あや、キャスさんもお出でくださいよーー。」

そんな叫びを背に受けて僕は宿に戻った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0861z/>

---

猫さんといっしょ

2011年12月29日22時39分発行